

宮後遺跡
浦田遺跡

MIYAUSHIRO SITE
URATA SITE

1991

山梨県明野村教育委員会

宮後遺跡

浦田遺跡

MIYAUSHIRO SITE

URATA SITE

例　　言

1. 本書は、県営國場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査の対象となった遺跡、調査期間、調査面積は、以下のとおりである。

宮後遺跡（山梨県北巨摩郡明野村浅尾64）

1990年5月29日～11月17日 14,144 m²

浦田遺跡（山梨県北巨摩郡明野村下神取183）

1990年11月22日～11月27日 910 m²

3. 宮後遺跡の鉱物分析は、会田信行氏（千葉県立成田園芸高校教諭）にお願いした。
4. 本書は、本編を大森隆志、付録を会田信行氏が執筆した。編集は、大森が行なった。
5. 本文挿図中の土層説明の色調は、「新版標準土色帖」（1967年 小山正忠・竹原秀雄）によった。
6. 本文挿図中の柱穴または、ピットの中の数字は掘り込み面からの深さである（単位cm）。
7. 発掘調査、報告書作成にあたって次の各位には、とくに御指導、御教示を賜った。記して謝意を表する次第である（敬称略）。

坂本美夫 吉岡弘樹 新津 健 八巻與志夫 保坂康夫

8. 本調査に関する資料の一切は、明野村教育委員会に保管されている。
9. 調査にあたった組織は以下のとおりである。

調査主体者 長田博徳 明野村教育委員会教育長

調査担当者 大森隆志 明野村教育委員会主事・文化財調査員

調査員 望月和幸

事務局 明野村教育委員会

調査参加者

三塚てつ子 清水恵三子 深沢あさ子 篠原啓子 宮川 寛 清水小春 阿部恵子
入戸野たかじ 入戸野つるじ 皆川和歌子 鈴木晶子 三井とも子 入戸野宏 秋山松義
入戸野フサコ 入戸野みづ子 篠原さかえ 水森広徳 奥水辰子 秋山半藏 清水八十二
早川かおる 入戸野和加代 向山み園 坂本恒子 須賀富雄 三井通子 三井つや子
清水茂子 皆川一子 守屋敏子 清水さゆり 清水真奈美 坂本富美子

本文目次

例 言

第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡	1
第2章 宮後遺跡の調査	
第1節 層序	8
第2節 平安時代の遺構と遺物	8
第1項 住居址と遺物	8
第2項 土坑	16
第3項 中世の遺構と遺物	16
第1項 地下式坑	16
第2項 土墳墓	36
第4節 時期不明の遺構	36
第1項 掘立柱建物跡	36
第2項 ピット群	38
第3項 土坑	38
第4項 積穴遺構	38
第5項 溝	38
第6項 焼土	38
第3章 浦田遺跡の調査	
調査の概要	48
参考文献	48
付編 宮後遺跡の砂粒組成・重鉱物組成	49

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡の位置.....	3	Fig. 28 18号住居址カマドA.....	29
Fig. 2 遺跡の位置.....	4	Fig. 29 18号住居址カマドB.....	29
Fig. 3 宮後遺跡調査範囲.....	7	Fig. 30 19号住居址.....	30
Fig. 4 層序.....	8	Fig. 31 19号住居址カマド.....	30
Fig. 5 1号住居址.....	17	Fig. 32 出土土器（1～5・7号住居址）.....	31
Fig. 6 2号住居址.....	17	Fig. 33 出土土器（7・10・11・13号住居址）.....	32
Fig. 7 3号住居址.....	18	Fig. 34 出土土器（14～18号住居址）.....	33
Fig. 8 3号住居址カマド.....	18	Fig. 35 出土土器（18号住居址）.....	34
Fig. 9 4号住居址.....	19	Fig. 36 出土土器（18～21号住居址、 1・8・9号土坑、7号溝）.....	35
Fig. 10 5号住居址.....	19	Fig. 37 出土土器（2・6・9・11・14号住居址）.....	36
Fig. 11 6号住居址.....	20	Fig. 38 地下式坑.....	37
Fig. 12 6号住居址カマド.....	20	Fig. 39 土壙墓.....	37
Fig. 13 7・8・12・21号住居址.....	21	Fig. 40 1号掘立柱建物跡.....	39
Fig. 14 9号住居址.....	22	Fig. 41 2号掘立柱建物跡.....	40
Fig. 15 10号住居址.....	23	Fig. 42 土壙墓出土古錢.....	40
Fig. 16 10号住居址カマド.....	23	Fig. 43 ピット群.....	41
Fig. 17 11号住居址.....	24	Fig. 44 壓穴遺構.....	41
Fig. 18 11号住居址カマド.....	24	Fig. 45 土坑.....	42
Fig. 19 13号住居址.....	25	Fig. 46 土坑.....	43
Fig. 20 13号住居址カマド.....	25	Fig. 47 土坑.....	44
Fig. 21 14号住居址.....	26	Fig. 48 清田遺跡調査範囲.....	47
Fig. 22 14号住居址カマド.....	26	Fig. 49 分析試料の砂粒組成と重鉱物組成.....	52
Fig. 23 15号住居址.....	27	Fig. 50 分析試料採取位置.....	53
Fig. 24 16号住居址.....	27	Fig. 51 宮後遺跡と中村道祖神遺跡、 白山1遺跡の対比.....	53
Fig. 25 17号住居址.....	28	Fig. 52 遺構全体図.....	別添図
Fig. 26 20号住居址.....	28		
Fig. 27 18号住居址.....	29		

写 真 図 版 目 次

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| PL. 1 遺跡の位置 | PL.14 19号住居址 |
| PL. 2 1号住居址・2号住居址 | PL.15 19号住居址出土土器 |
| PL. 3 3号住居址・4号住居址 | PL.16 6・8・9号住居址出土土器 |
| PL. 4 5号住居址 | 21号住居址 |
| PL. 5 6号住居址・7号住居址・8号住居址 | PL.17 地下式坑・土壤墓 |
| PL. 6 9号住居址・10号住居址 | PL.18 土壙墓・土坑 |
| PL. 7 11号住居址 | PL.19 土坑 |
| PL. 8 12・15・16・20号住居址 | PL.20 土坑 |
| PL. 9 13号住居址 | PL.21 土坑 |
| PL.10 14号住居址 | PL.22 1号掘立柱建物跡・1号ピット群 |
| PL.11 17・18号住居址 | PL.23 2号掘立柱建物跡・溝・堅穴遺構 |
| PL.12 18号住居址出土土器 | PL.24 溝・層序・81号土坑出土土器 |
| PL.13 18号住居址出土土器 | PL.25 遺跡の位置 |
| | PL.26 調査風景・出土土器 |

第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡

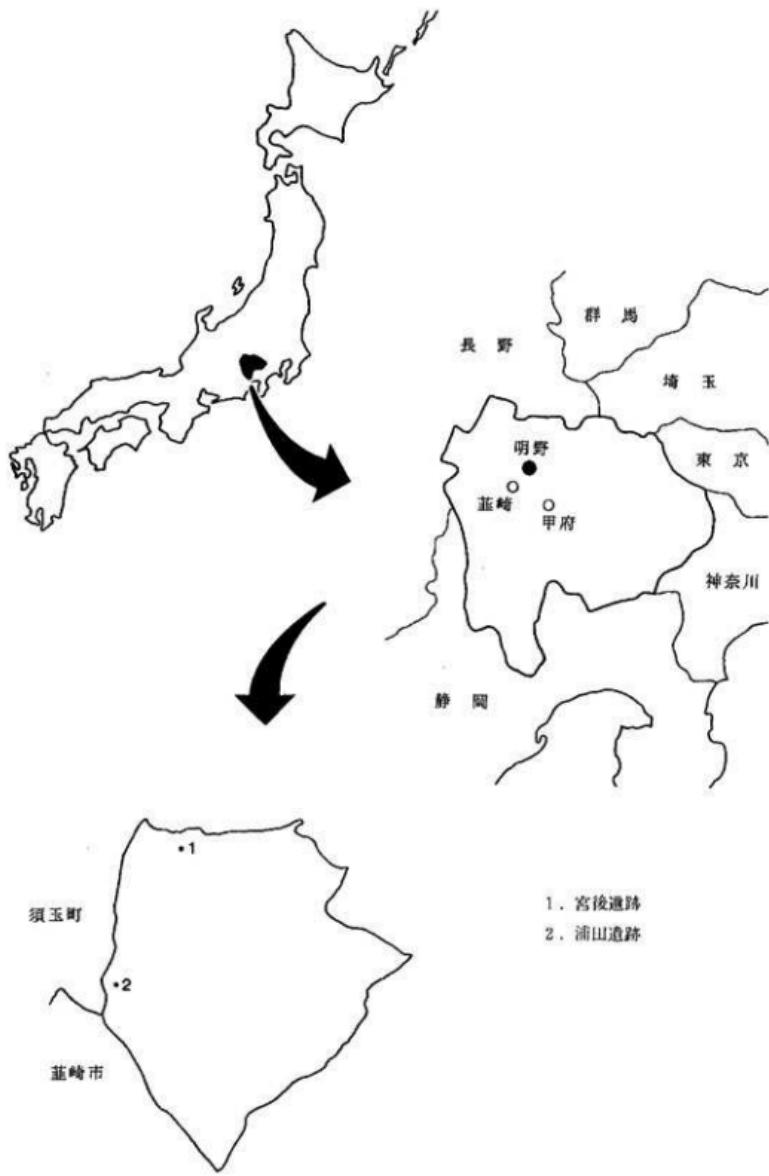


Fig. 1 遺跡の位置

宮後遺跡

茅ヶ岳西麓には塩川沿いに3段の明瞭な河岸段丘があるが、当該遺跡は塩川左岸、中位段丘面（小池平面）上の南西向き緩斜面に位置する。遺跡の標高は約645 mで、塩川からの比高は120 mある。周辺には、北原遺跡（平安）、薬師堂遺跡（縄文中期・平安）、白山I遺跡（縄文・平安）、中村道祖神遺跡（縄文・弥生・平安・中世）、踊石II遺跡（縄文・中世・江戸）などの遺跡がある。

浦田遺跡

浦田遺跡は、塩川沿いの河岸段丘の下位段丘面上の西向き緩斜面に位置する。遺跡の標高は約482 mで、塩川からの比高は25 mある。周辺には、神取I遺跡（平安）、神取II遺跡（縄文）などの遺跡がある。これらは、1990年12月の埋蔵文化財確認調査で発見された遺跡である。



1. 宮後 2. 浦田 3. 北原 4. 中村道祖神 5. 薬師堂
6. 踊石II 7. 白山I 8. 神取I 9. 神取II

Fig. 2 遺跡の位置 (S=1/50,000)

第2章 宮後遺跡の調査



Fig. 3 宮後遺跡調査範囲 (1/2000) (XとYは第Ⅳ系の座標値)

第1節 層序 (Fig. 3, PL. 24)

土層の把握に関しては、I-1グリッドに縦坑を掘り、その北面を利用した。田の耕作土から約3m70cm下の礫層まで掘り下げて層の観察を行なった。以下の記述にあたっては、発掘調査中の観察を中心としながら、公田氏の鉱物分析の結果も参考にした。

- I層 田の耕作土
- II層 5 YR4/8: 赤褐色土(田の床土)
- III層 7.5YR3/4: 暗褐色土
- IV層 7.5YR4/6: 褐色ローム
- V層 10YR4/6: 褐色ローム
- VI層 10YR4/6: 褐色ローム。ローム中に白色粒子を多く含むので、II層よりも白く見える。
- VII層 10YR6/8: 明褐色バミス。Pm-1と思われる。水分を多く含み、乾燥すると白くなる。
- VIII層 10YR8/3: 浅黄橙色粘土層。Pm-1が粘土化したもの。
- IX層 10YR5/6: 黄褐色粘土層。Pm-1が粘土化したもの。
- X層 2.5Y6/1: 黄灰色粘土層。酸化鉄を含む。
- XI層 磯層

第2節 平安時代の遺構と遺物

第1項 住居址と遺物

住居址は都合21基発見された。以下、これらについて説明する。尚、平安時代の土器の時期区分は、坂本・末木・堀内(1983)を参考にした(P.38参照)。

1号住居址 (Fig. 5, PL. 2)

1989年12月の試掘の時に発見された。試掘坑が住居址の中央にはいったので断面図の中央が抜けている。住居址の南と西側はすでに失われていた。

規模・形態：東西3.6m、南北3.1m(推定値)で、方形プランを呈していたと思われる。

カマド：石組。東壁のやや南寄りにある。試掘の時カマドを壊して

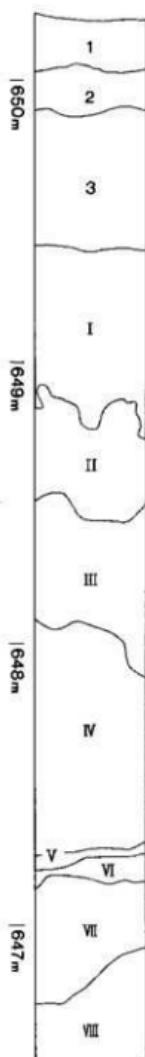


Fig. 4 層序 (S=1/20)

しまい、遺存状態はよくない。右側の石列だけが残っていた。

遺物 (Fig. 32) 0101：土師器甕。口縁部破片。この他の遺物は、甕、杯の破片が少量出土している。

時期：少量の出土遺物から時期は限定できないが、平安時代としておきたい。

2号住居址 (Fig. 6, PL. 2)

南側のプランは、斜面の下側になるので、ロームに対する掘り込みが浅く、ローム面での確認はできなかった。

規模・形態：東西5.0 m、南北5.0 m（推定値）で、方形プランを呈していたと思われる。

カマド：石組。石組の礫がわずかに残っていた。東壁の南寄りにある。

床面：北側の一部と西側に周溝がある。北側にはテラス状の施設がある（床面からの高さは約10 cm）。

遺物 (Fig. 32) 0201：土師器杯。内外面ともにナデ調整。(Fig. 37) 0202・0203：須恵器破片。この他の遺物は、土師器杯の破片が少量出土している。

時期：1号住居址と同様に、少量の出土遺物から時期は限定できないが、平安時代としておきたい。

3号住居址 (Fig. 7, PL. 3)

住居址の北側は田の水路に若干干渉されていた。

規模・形態：東西4.3 m、南北4.2 mで、方形プランを呈している。

カマド：石組。東壁の南寄りにある。右側のソデの部分はロームが若干もりあがっている。

床面：住居址中央部の床が焼けている。南西コーナー付近が溝のようになっている。

遺物 (Fig. 32) 0301・0302：土師器甕。0303：土師器甕。底部にはわずかに木葉痕がある。外側は縦のハケメ。底部近くには指頭圧痕がある。これらの土器の他には、内黒土器の小破片が出土している。

時期：1・2号住居址と同様に、少量の出土遺物から時期は限定できないが、内黒土器の存在により、X～廻期に属すると思われる。

4号住居址 (Fig. 9, PL. 3)

この住居址はおそらく、田普請の時にはほとんどが壊されてしまったものと思われる。2号住居址南側にあり、西北コーナー部分のみ残存していた。また東側には貯蔵穴と思われるものがあるが、かなり削平されていて、残存部分は浅い。土師器片が出土した。その他、カマド燃焼部の焼土のみが残っていた。

規模・形態：全貌は不明。東西2.4 m、南北3.7 m（現存値）。

カマド：燃焼部のロームの赤化のみ残っていた。

床面：東側の一部、北側に周溝あり（塀の中にえぐれて入っている）。

遺物 (Fig.32) 0401：土師器坏。外面は、ヘラ削り。内面には暗文がある。0402・0403：土師器坏。0403は内黒土器で、底部には糸切り痕がある。

時期：暗文を有する土器や内黒土器が出土することにより、X期に属すると思われる。

5号住居址 (Fig.10, PL. 4)

住居址の西側は上、下の田にかかっているので、下の田を作る時に覆されている。また、西側が斜面の下側になるので当然覆土が薄い。

規模・形態：東西3.3m、南北3.2m。方形プランを呈していたと思われる。

カマド：石組。東壁の南寄りにある。表土剥ぎの時に壊されたので遺存状態は、きわめて悪い。石組の石が残っており、小範囲に焼土があった。特別の掘り込みはなかった。

床面：周溝が、東、北側に残る。

遺物 (Fig.32, PL. 4) 0501：土師器坏。カマドから出土。器面は、内外面ともに磨滅が著しい。器体部には暗文なし。底部は口縁部にくらべ小さく (径4.9cm) ヘラ削りされている。口縁部は、肥厚し、玉縁になっている。図示した他には、内黒土器、肥厚した口縁部の破片、甕の破片が出ている。

時期：資料が少ない点を考慮してX～XI期前後と考えたい。

6号住居址 (Fig.11, PL. 5)

規模・形態：東西3.0m、南北2.7m。方形プランを呈している。

カマド：石組。東壁の南寄りに位置し、支脚（石）がカマドの中央に残っていた。カマドの断面図から支脚を設置した過程がよくわかる。つまり、カマドの底部を深く掘り込み、支脚とする石を据えた後すぐ埋めもどし、平坦にした。その面をカマドの底部として使用したと考えられる。

床面：周溝が北、西側にある。

遺物：PL.16に写真で示した。土師器坏・甕の小破片が出土した。他には、Fig.37～0601の須恵器破片が出土している。

時期：少量の出土遺物から時期は限定できないが、平安時代としておきたい。

7号住居址 (Fig.13, PL. 5)

2号住居址の東側にある。削平が著しく、掘り込み、カマドの石などは残っていないかった。部分的には、カマドと思われるところの周辺に黒色土が残っていた。そこには焼土があり、カマドの然焼部と考えられる。焼土の右脇の残存黒色土から土器が出土した。

カマド：ローム赤化のみ（掘り込みなし）。

遺物：(Fig.32・33) 0701～0703：土師器甕。図示した他にも土師器の甕の破片が出ていた。

時期：少量の出土遺物から時期は限定できないが、平安時代としておきたい。

8号住居址 (Fig.13, PL. 5)

住居址北側コーナー部分のみ残存する。その他は、すでに削平されていた（棚田と棚田の境に

あるので下の部分は削平されて消滅していた。コーナー部の三角形だけの残存であるが、土師器が床面から出土（3点）しているので住居址と判断した。

規模・形態：東西1.0m、南北1.6m（現存値）。

カマド：消滅していた。

遺物：PL.16の写真的土師器壺の小破片が出土した。

時期：平安時代。

9号住居址（Fig.14, PL. 6）

住居址の南、西側は、削平されている。また、プランや西側の周溝の状況からみると、重複していたと考えられる。しかし、西側が削平されているので詳細は不明である。

規模・形態：東西6.7m、南北4.4m（現存値）。重複と思われるところを除く。

カマド：東壁の南寄りに焼土と礫があり、これが、カマドと思われる。

床面：北、西側に周溝がある。床面中央には円形の土坑がある。

遺物：遺物の数は、住居址の面積の割には少ない。主なものを拓本と写真で示した。

Fig.37-0901：須恵器片。写真図版（PL.16）で示したもののは、土師器壺・壺の破片である。他に、内黒土器の小破片が出土している。

時期：時期を限定できる資料に乏しいので、ここでは平安時代としておく。

10号住居址（Fig.15, PL. 6）

住居址の南側は、すでに削平されていた。

規模・形態：東西3.3m、南北3.0m（現存値）。方形プランを呈している。

カマド：東壁の南寄りにある。石組。

遺物（Fig.33）1001：土師器皿。内外面ともにナデ調整。底部の近くはヘラ削り。口縁部が若干肥厚する。1002：土師器壺。器体の磨減が著しい。暗文はない。口縁部が肥厚する。1003：土師器壺。内外面ともにナデ調整。暗文はない。底部には回転糸切り痕がある。

時期：XII期または、XIII期に属すると思われる。

11号住居址（Fig.17, PL. 8）

田んぼをつくったときの削平が著しく、住居の周溝とカマドが少し残存する。

規模・形態：東西5.3m、南北5.0m。方形プランを呈している。

カマド：東壁の南寄りにある。削平が著しくカマドの遺存状態はわるいが、底部には平石が數いてあった。

床面：周溝がめぐる。南西コーナー付近は不明だが、全周していたと思われる。南壁側の溝から礫が出土した。

遺物（Fig.33）1101～1107：いずれも土師器の壺と皿である。1101：壺。口縁部で若干外反し口唇部は少しふくらむ。内面にわずかに暗文がある（X期）。1102：壺。内面に暗文あり。外面下

半部は、斜めのヘラ削り。口唇部は丸形（VII・IX期）。1103：坏。内黒土器。1104：坏。外面は斜めヘラ削り、内面はナデ調整。底部は全面ヘラ削り。1105：坏。内黒土器。1106：皿。外面の底付近と底部は回転ヘラ削り。その他の部分はナデ調整。口縁部付近に若干のくびれがある（IX・X期）。1107：坏。口唇部は丸形で、口径 \geq 底径×2の範疇にはいる（VIII期）。（Fig.37）1108：須恵器甕。

時期：図示した土器以外にも、内黒土器、口唇部が丸形や肥厚する土器の破片が出土している。内黒土器はX-XIII期の土器に伴うとされているが、本住居址からXI期以降の土器は出土していないのでX期のものと思われる。これらをまとめて、VIII-X期に属すると考えたい。

12号住居址（Fig.13, PL. 8）

田舎跡のときに住居址の覆土の大半が削平されてしまったと思われる。覆土が、5~10cm程度残っていた。

規模・形態：東西3.6m、南北3.2m（現存値）。方形プランを呈している。

カマド：削平され残っていなかった。東壁の南寄りの覆土中に焼土がわずかに残っていた。

遺物・時期：出土遺物はないが、形態や周囲の遺構の状況から平安時代の住居址であったと思われる。

13号住居址（Fig.19, PL. 9）

規模・形態：東西3.4m、南北3.1m。方形プランを呈している。

カマド：石組。東壁の南寄りにある。支脚があり、底部から約12cm出ている。カマド左下方に、石組の石を積み重ねたような状態の大きな礫があった。

床面：中央に深さ約10cmの土坑がある。

遺物（Fig.33）1301：土師器坏。器体部上半部はナデ、下半部は斜めヘラ削り。内面はナデ調整。底部は広めで、口唇部は丸形を呈する（VIII期）。1302：土師器皿。器体部は、横位回転ヘラ削り。内面には同心円状の暗文がある。底部は全面ヘラ削りで、口唇部は丸形を呈する。また、口縁部付近のくびれは顕著ではない（IX期）。1303：土師器坏。器体部下半は斜めヘラ削り。内面には暗文がある。底部は周囲1cmくらいをヘラ削りしているが、回転糸切り痕は、かすかに見える程度である。口唇部は少し肥厚する（X期）。1304：土師器甕。底部に木葉痕がある。内外面ともにハケメが観察できる。

時期：出土土器から判断してVIII-X期と思われる。

14号住居址（Fig.21, PL.10）

規模・形態：東西3.4m、南北3.1m。方形プランを呈している。

カマド：石組。住居址の東壁の南寄りにある。カマドの底には大きな平石をしき、それを焚き口としている。平石の下には、石が平らになるように礫を入れている。支脚が3個あり、床から約20cm出していた。支脚は若干埋められている程度であった。

床面：Pm-1が混じる層の直上にある。周溝が、東・北・西側にある。

遺物（Fig.34）1401・1402・1404・1408：土師器坏。全て内黒土器。1410：土師器皿。内黒土器。底部に貼付高台を有する。1403：土師器坏。カマド内出土。器体部内外面ともにナデ調整。底部に回転糸切り痕がある。口唇部は丸形を呈する（IX期）。1405：土師器皿。器体部上半はナデ、下半は横回転のヘラ削り。内面はナデ調整。器形には、くびれ等の大きな変化はないが、口唇部付近で少し外反し口唇部が少し肥厚する（X期）。1406：土師器皿。器体部上半はナデ、下半は横回転のヘラ削り。内面はナデ調整。口縁部付近の内側で若干くびれる。口唇部は丸形を呈する（IX期）。1407：須恵器皿。内外面ともにナデ調整で、内面には釉が部分的にみられる。底部はナデ調整され、高台が貼り付けられている。1409：土師器甕。外外面にハケメがみられる。（Fig.37）1411：須恵器甕。

時期：出土土器のうち内黒土器はX～Ⅲ期にみられるものであるが、Ⅱ期以降の土器は出土していないのでX期に属するものと思われる。したがって、本住居址の時期はIX・X期。

15号住居址（Fig.23, PL. 8）

住居址の北東コーナー付近だけが残存していた。他は、すでに削平されていた。

規模・形態：東西2.2 m、南北2.4 m（現存値）。

カマド：残存部にはない。

遺物（Fig.34）1501：須恵器坏。図示した資料以外に、内黒土器破片、土師器坏の口唇部破片（少し肥厚する）などが少量出土している。

時期：少量の出土遺物から時期は限定できないが、須恵器坏、内黒土器等によりIX・X期を前後する時期と考える。

16号住居址（Fig.24, PL. 8）

住居址の北東コーナー付近の残存と思われる。他は、すでに削平されていた。

規模・形態：東西2.0 m、南北3.6 m（現存値）。

カマド：残存部にはなかったが、セクションポイントA付近の覆土中に焼土がみられた。

遺物（Fig.34）1601：土師器坏。内黒土器。図示した資料以外に、内黒土器破片が少量出土している。

時期：少量の出土遺物から時期は限定できないが、内黒土器が出土することより、X～Ⅲ期を前後する時期と思われる。

17号住居址（Fig.25, PL.11）

削平が著しく、覆土はほとんど残っていなかった。住居址の北側部分だけ残存する。

規模・形態：東西3.6 m、南北1.8 m（現存値）。

カマド：住居址の東壁にある。破壊が顕著で、石組の石だけが残っている状態だった。

床面：東・西・北側に周溝がある。南側は削平で不明。

遺物 (Fig.34) 1701：土師器壺。内黒土器。図示した資料以外に、土師器壺の破片がある。

時期：少量の出土遺物から時期は限定できないが、内黒土器が出土することより、X～Ⅹ期を前後する時期と思われる。

18号住居址 (Fig.27, PL.11)

北壁中央部から南東コーナーにかけて7号溝と、また、南西コーナーにて19号住居址と重複する。しかし、19号住居址との重複部分が少ないので、互いの先後関係をセクションで把握できなかった。

規模・形態：東西8.0 m、南北7.8 m。方形プランを呈している。大きな住居址であるので、拡張や19号住居址以外との重複等を考慮して調査したが確証はつかめず、単独のものと判断した。

カマド：住居址の東壁に2ヵ所ある。カマドBの底部には平石が敷かれていた。

床面：搅乱が激しく凹凸がある。

遺物 (Fig.34～36) 1801：土師器壺。器体部下半は斜めヘラ削り、その他の部分は、ナデ調整。口唇部は丸形で、口径に比べ底径が小さく、口径>底径×2の領域にある(IX期)。1802：土師器壺。器体部下半は斜めヘラ削り、その他の部分は、ナデ調整。底部は全面ヘラ削りで口径に比して小さい。口唇部は少し外反し、端部が若干肥厚する(X期)。1803：土師器壺。内黒土器。内外面ともにナデ調整。1804・1805：土師器壺。器体部下半は斜めヘラ削り、その他の部分は、ナデ調整。底部は全面ヘラ削り。口径に比して底径が小さい。口唇部は両方とも若干肥厚する(X期)。

1806：土師器壺。器体部下半は斜めヘラ削り、その他の部分はナデ調整で、内面に暗文を有する。底部は全面ヘラ削り。底径は1805等と比べ大きい。口唇部は丸形(VII期)。1807：土師器壺。器体部下半は斜めヘラ削り、その他の部分はナデ調整。底部は、部分ヘラ削り。回転糸切り痕がかすかにみえる。口唇部は丸形を呈する(IX期)。1808：須恵器壺。口径は比較的大きく、口径>底径×2の領域にある。口唇部は丸形で底部はヘラ削り(IX期)。1809・1810：土師器壺。内黒土器。底部に回転糸切り痕がある。1811：土師器壺。内黒土器。内外面ともにナデ調整。内面に暗文を有することより時期はX期と考えたい。1812：土師器壺。内黒土器。口唇部は若干肥厚する(X期)。

1813：土師器壺。内黒土器。内外面ともにナデ調整。底部はヘラ削り。1814：土師器壺。内黒土器。器体部下半は回転ヘラ削り、その他の部分はナデ調整。内面に暗文を有し、口唇部は若干肥厚する(X期)。1815：土師器壺。内黒土器。内外面ともにナデ調整。内面に暗文を有し、口唇部は若干肥厚する(X期)。1816：土師器壺。内黒土器。1817：土師器壺。内黒土器。器体部下半は斜めヘラ削り、他はナデ調整。底部はヘラ削り。内面に暗文を有する(X期)。1818：須恵器壺。内外面ともにナデ調整で釉が部分的にかかっている。口径に比して底径が小さく、口径>底径×2の領域にある(IX期)。1819：須恵器壺。器体部下半は横位回転ヘラ削り、他はナデ調整。釉が内面と外面の上半にかかる。口径に比して底径が小さく、口径>底径×2の領域にある(IX期)。

1820：土師器皿。器体部下半は斜めヘラ削り、他は磨滅が顕著で不明。口唇部は丸形(IX期)。1821：

土師器皿。磨滅が顕著で調整方法等は不明。口唇部が若干肥厚する(X期)。1822：土師器杯。器体部下半は斜めへラ削り、他の部分はナデ調整。内面に暗文あり。口唇部は丸形を呈する(VII・IX期)。1823：土師器皿。磨滅が顕著で調整方法等は不明。器形にくびれはなく、口唇部がやや肥厚する(X期)。1824：土師器杯。内黒土器。1825：土師器皿。底部と器体部下半は回転へラ削り、他はナデ調整。口縁部付近で少しきびれる。口唇部は丸形を呈する(IX期)。1826・1828：土師器皿。内黒土器。1827：須恵器皿。全面ナデ調整。釉が内側に部分的にかかっている。1829・1830：土師器皿あるいは杯の高台部分。内黒土器。1831：土師器皿。器体部は内外面、ナデ調整。底部は回転へラ削り。口唇部は丸形を呈する(X期)。1832：須恵器皿。全面ナデ調整。釉が表面にかかっている。口縁部に極端なくびれを有する。1833：土師器杯。外面は磨滅が顕著で調整方法等は不明。内面に暗文がある。口唇部は肥厚し所謂玉縁をなす(X期)。1834：上師器皿。器体部下半は横位回転へラ削り、他の部分はナデ調整。器体部なかばに、くびれがあり、口唇部は、やや肥厚する(IX・X期)。

時期：出土土器はVII～X期にわたる。また、多く出土した内黒土器は、X～XII期の土器に伴うとされているが、本住居址からXI期以降の土器は出土していないのでX期のものと思われる。以上のことより、木住居址の時期はVII～X期。

19号住居址 (Fig.30, PL.14)

18号住居址と重複する。南側は、削平されて残存しない。

規模・形態：東西5.0 m、南北6.0 m（現存値）。方形プランを呈していたと思われる。

カマド：北壁の西寄りに1つ（カマドA）、東壁に2つ（カマドB・C）ある。カマドAは壁に対する掘り込みと焼土が残っていた。遺物や石組の礎は残っていなかった。カマドB：石組。煙道が残存した状態で発見された。煙道は、ロームをくり抜いて作ったのではなく、ブリッジ部に礎を置き大井にして、その上に土をのせたものである。カマドC：石組。カマドの周囲には石組の礎が多数残っていた。

床面：周溝が、東・北・西側に部分的に存在する。

遺物 (Fig.36) 1901：土師器杯。器体部下半は斜めへラ削り、他の部分はナデ調整。底部は回転糸切り痕の周囲を少し削っている。口唇部は若干肥厚する(X期)。1902：土師器皿。内外面はナデ調整。底部に回転糸切り痕あり。口縁部は肥厚する(X期)。1903：土師器杯。内黒土器。底部に回転糸切り痕あり。1904：土師器杯。器体部下半は斜めへラ削り、他の部分はナデ調整。底部は回転糸切りの後へラ削り。口唇部は肥厚する。全体的に深みがある感じの土器である(X・XI期)。1905：須恵器杯。全面ナデ調整。口径は底径と比してあまり大きくない。口径<底径×2の範囲にある(VIII期)。1906：土師器杯。器体部下半は斜めへラ削り、他の部分はナデ調整。底部は回転糸切りの後へラ削り。口唇部は丸形を呈する(VII・IX期)。1907：土師器杯。器体部下半は斜めへラ削り、他の部分はナデ調整。底部は回転糸切りの後へラ削り。口唇部は肥厚し所謂隆玉

縁を呈する（X・XI期）。1908：土師器皿。全面ナデ調整。口唇部は隆起線を呈する（XI・XII期）。1909：土師器皿。外面は摩耗が著しい。内面はナデ調整、底部は回転ヘラ削り。口唇部は少し肥厚する（X期）。

時期：出土土器から判断するとVIII-XI期にわたると思われる。

20号住居址 (Fig.26, PL. 8)

削平されて多くが失われていた。北側と東側の一部を残す。

規模・形態：東西4.6 m、南北0.9 m（現存値）。

カマド：石組。北壁にある。削平され石組の礫を2個残す。

床面：周溝が東側に存在する。

遺物 (Fig.36) 2001：須恵器杯。内外面ナデ調整。出土遺物は図示した以外に少量の土師器杯・甕の破片がある。

時期：少量の出土遺物から時期は推定できないが、平安時代としておきたい。

21号住居址 (Fig.13, PL.16)

住居址の掘り込みは確認できなかった。石組のカマドの周囲から焼土、土器などが確認された。周溝や、確実な床面の把握ができなかつたので住居址の規模・形態は不明である。

遺物 (Fig.36) 2101：土師器杯。器体部下半は斜めヘラ削り、その他はナデ調整。底部は全面ヘラ削り。口唇部は丸形を呈する。IX期と思われる。

時期：IX期を前後する時期と思われる。

第2項 土坑

平安時代の土坑と考えられるものは、1号土坑 (PL.18) と81号土坑 (Fig.47, PL.21) である。両方とも凸形の小ピット状のものであるが土師器の杯が出土した。その他多くの土坑（小ピット状のものを含む）は時期を決定するにたる出土遺物に乏しい。

1号土坑出土の杯 (Fig.36) SK 1はX期に、81号土坑の杯 (Fig.36, PL.24) SK81はVII期に属すると思われるが、遺構の時期は、それぞれの前後する時期であろう。

第3節 中世の遺構と遺物

第1項 地下式坑

1号地下式坑 (Fig.38, PL.17)

主軸：北北西—南南東

天井の一部は、表土剥ぎ時に重機の重さで落ちてしまった。地下室の平面形は、長方形で、長辺2.8 m、短辺1.7 m。深さは、中央部で2.0 m。底部は、基本層序のVII層（粘土層）上面にある。

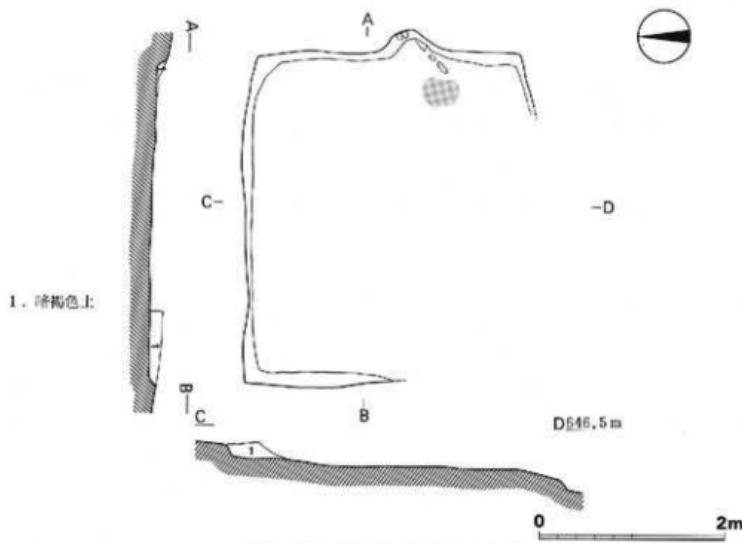


Fig. 5 1号住居址 ($S=1/60$)

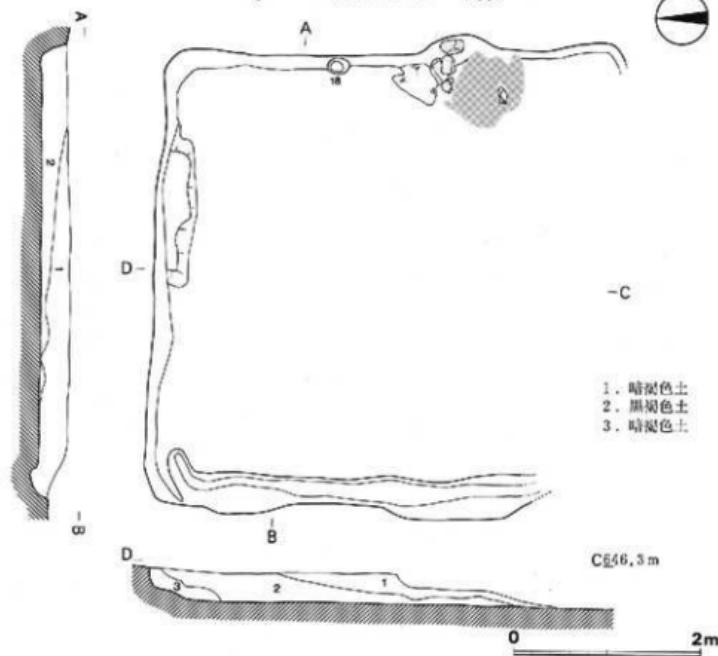


Fig. 6 2号住居址 ($S=1/60$)

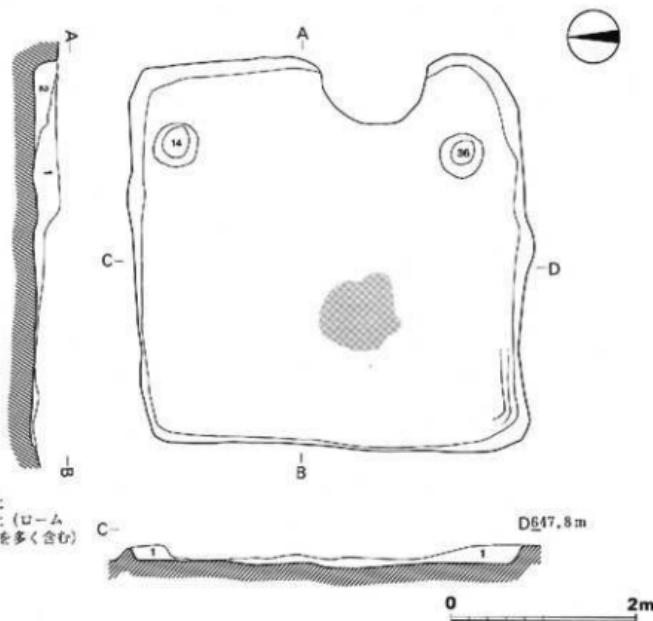


Fig. 7 3号住居址 (S=1/60)

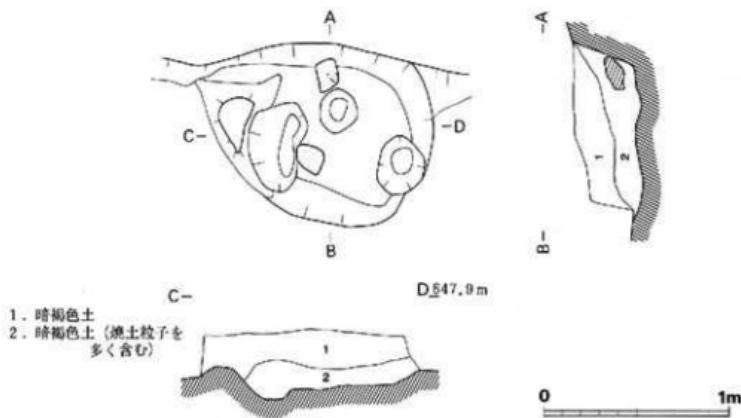


Fig. 8 3号住居址カマド (S=1/30)

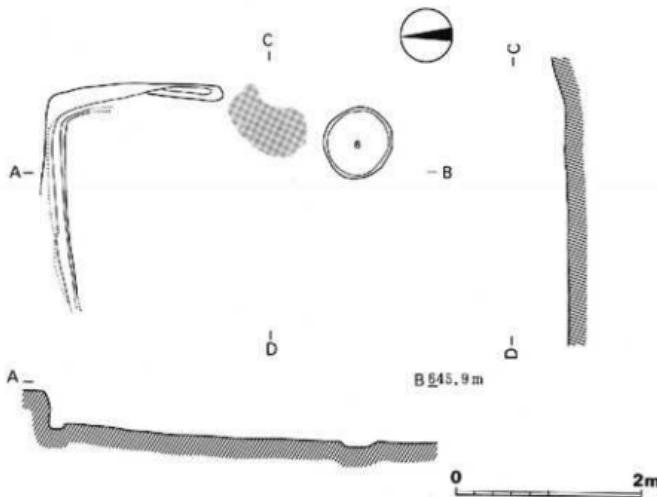


Fig. 9 4号住居址 (S=1/60)

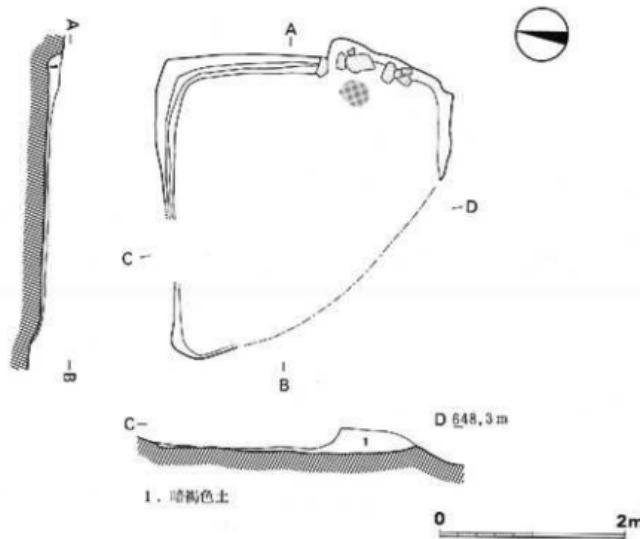


Fig. 10 5号住居址 (S=1/60)

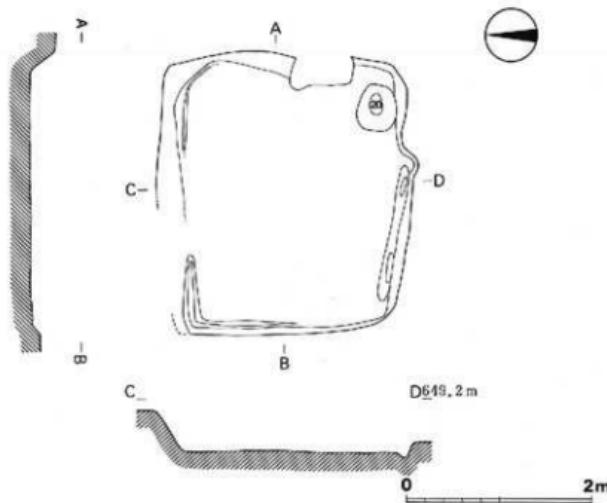


Fig.11 6号住居址 (S=1/60)

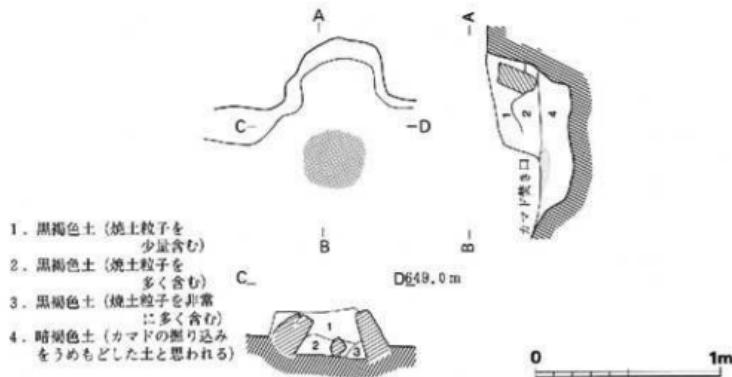


Fig.12 6号住居址カマド (S=1/30)

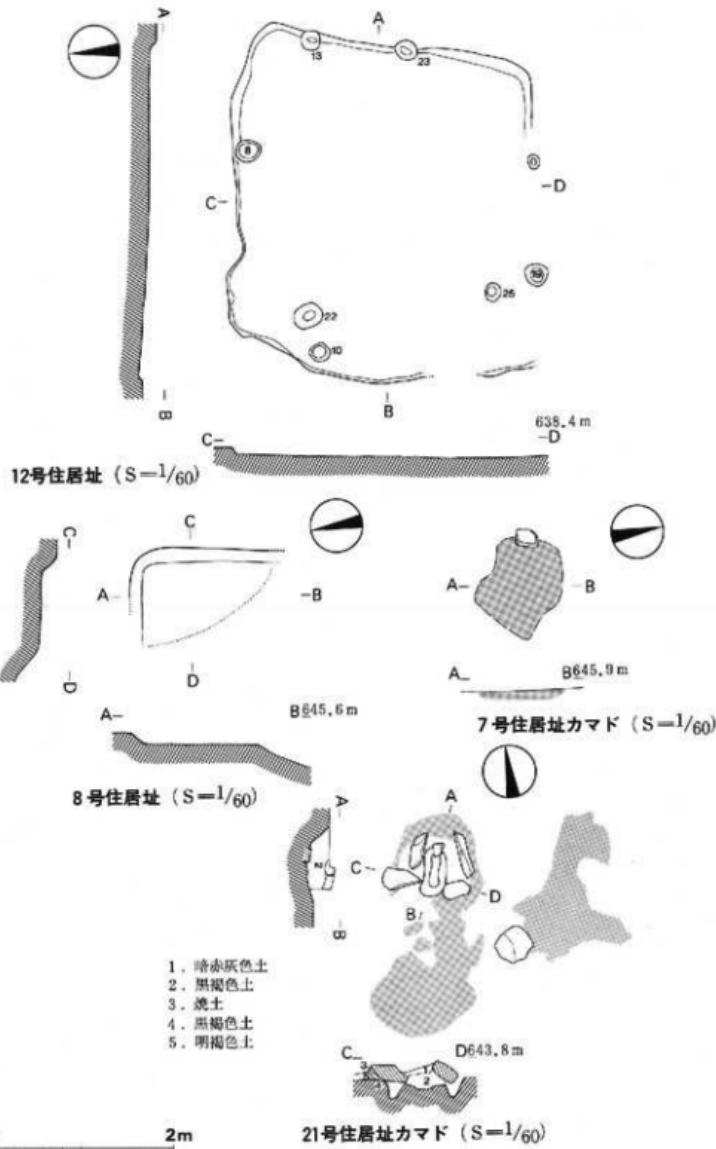


Fig. 13 7・8・12・21号住居址

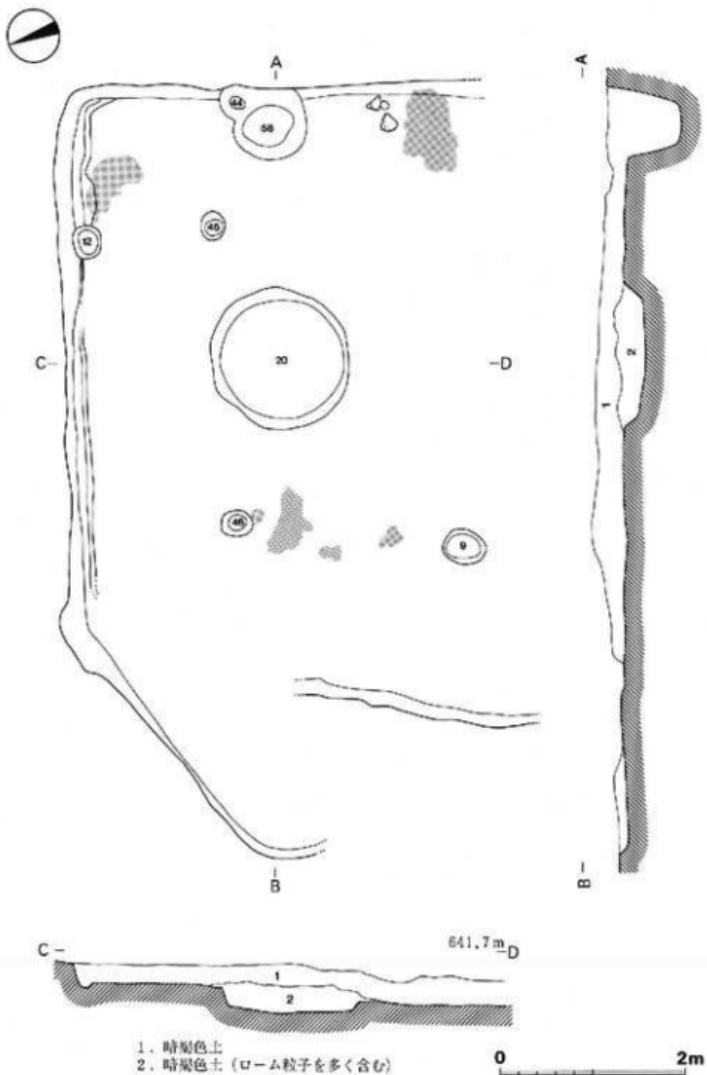


Fig. 14 9号住居址 (S-1/60)

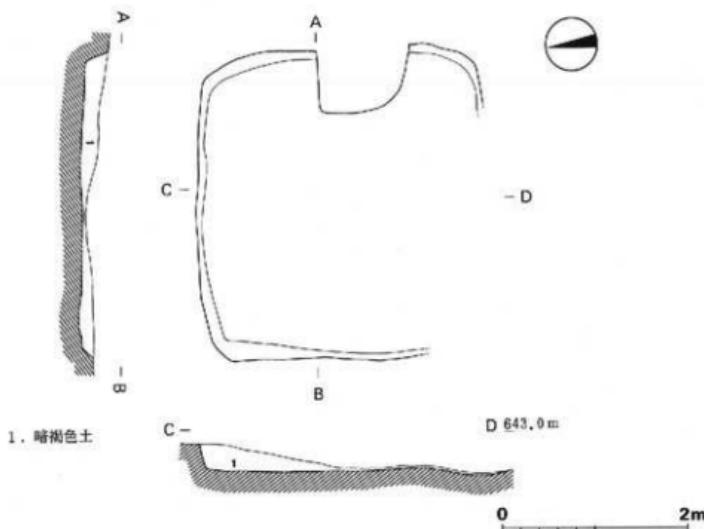


Fig. 15 10号住居址 (S-1/60)

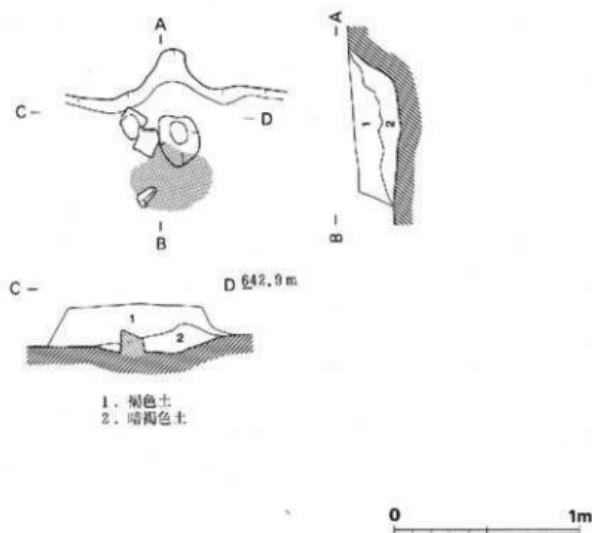


Fig. 16 10号住居址カマド (S-1/30)

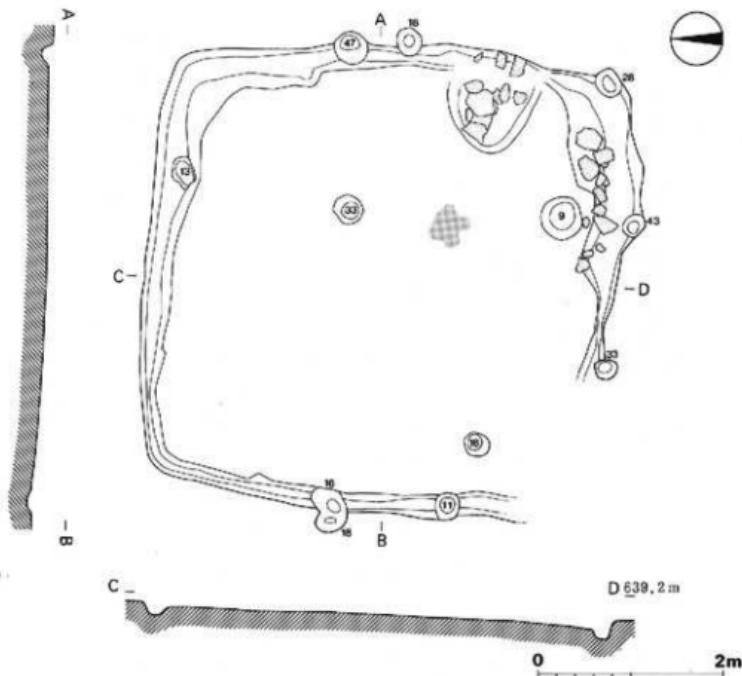


Fig.17 11号住居址 (S-1/60)

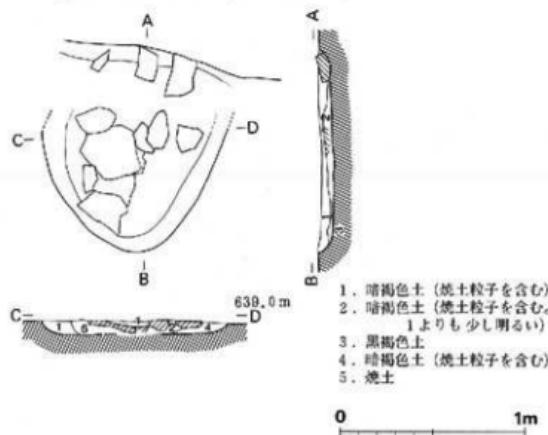


Fig.18 11号住居址カマド (S-1/30)

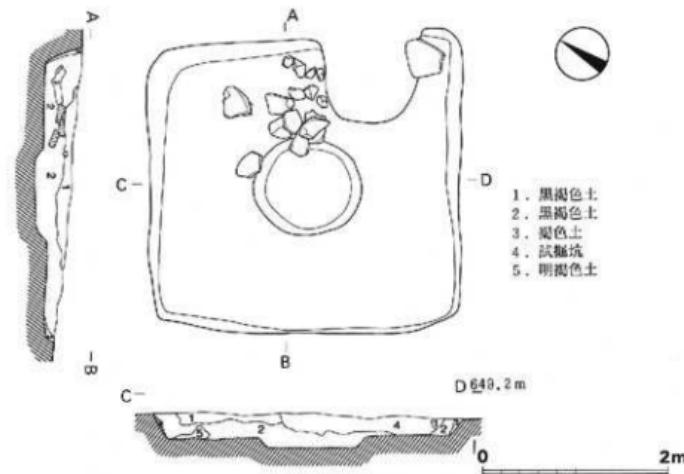


Fig. 19 13号住居址 (S-1/60)

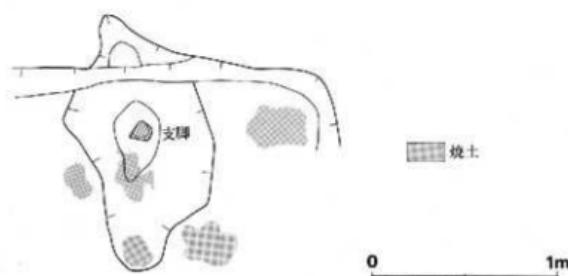
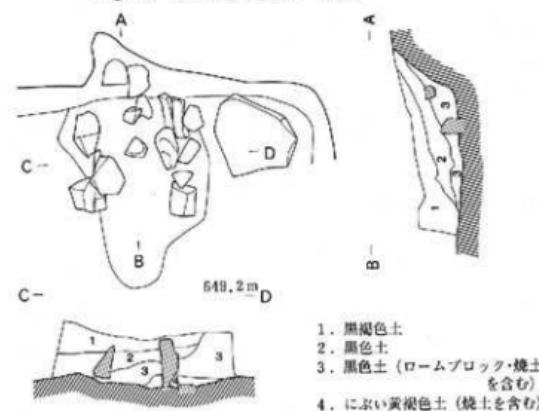


Fig. 20 13号住居址カマド (S-1/30) (下: 磨除去後)

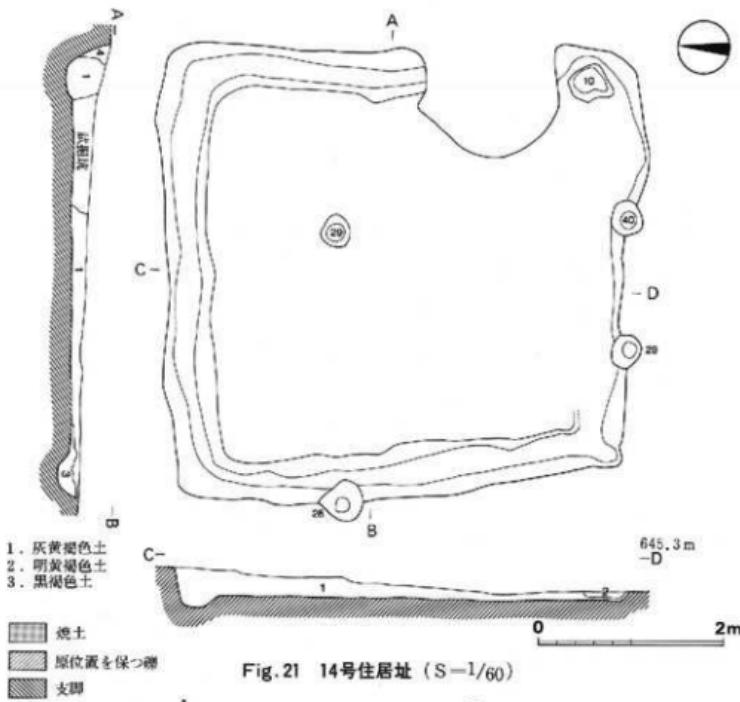


Fig. 21 14号住居址 (S-1/60)

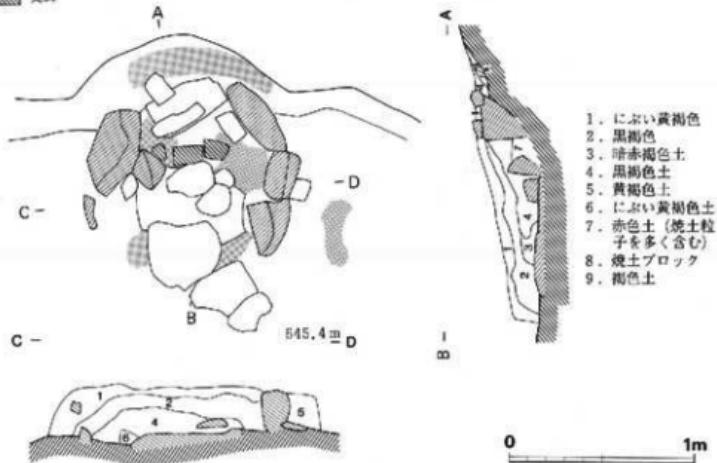


Fig. 22 14号住居址カマド (S-1/30)

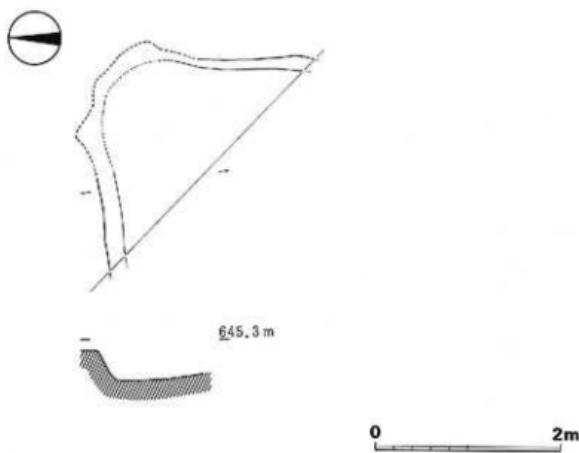


Fig. 23 15号住居址 (S=1/60)

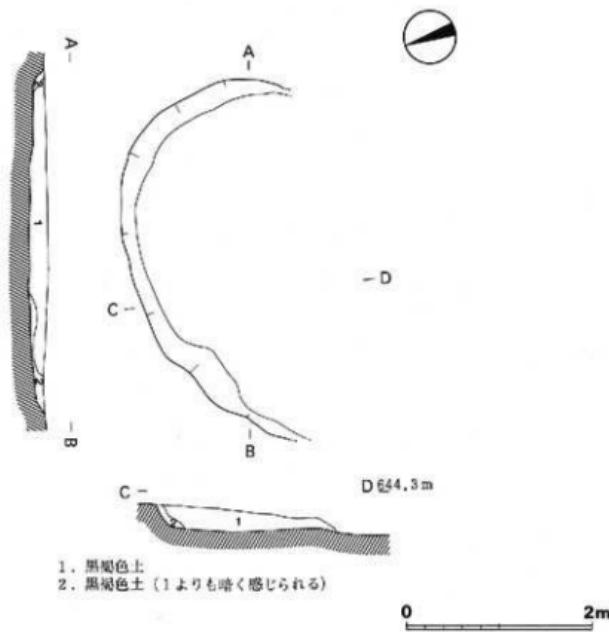


Fig. 24 16号住居址 (S=1/60)

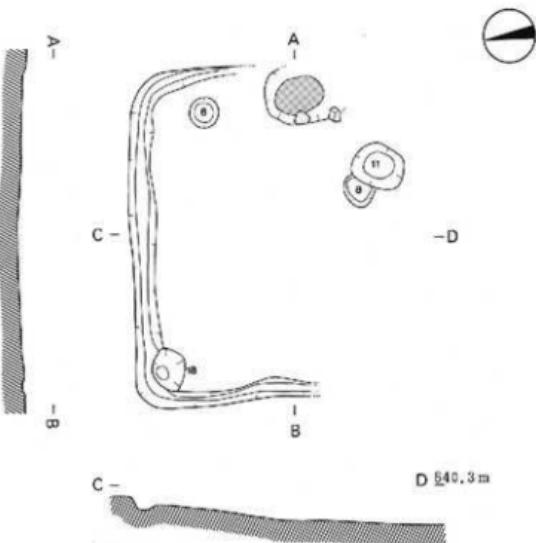


Fig. 25 17号住居址 (S=1/60)

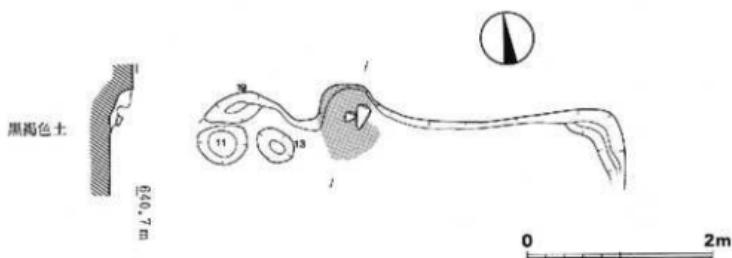


Fig. 26 20号住居址 (S=1/60)

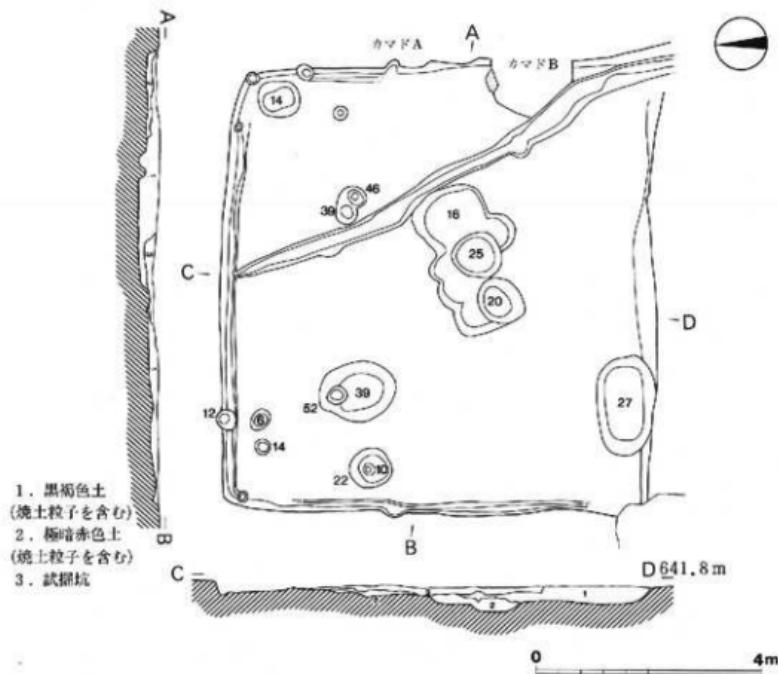


Fig. 27 18号住居址 (S-1/100)

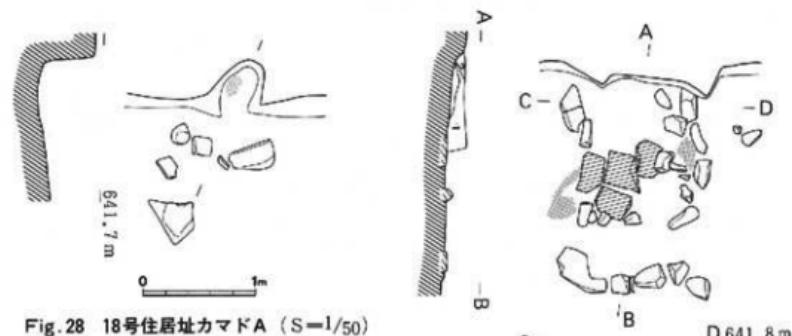


Fig. 28 18号住居址カマドA (S-1/50)

- 1. 暗赤灰色土 (燒土粒子を含む)
- 2. 暗赤色土 (燒土粒子を多く含む)
- 3. 極暗赤褐色土 (燒土粒子を含む)
- 4. 黑褐色土
- 5. 黑褐色土 (燒土粒子を含む)

Fig. 29 18号住居址カマドB (S-1/50)

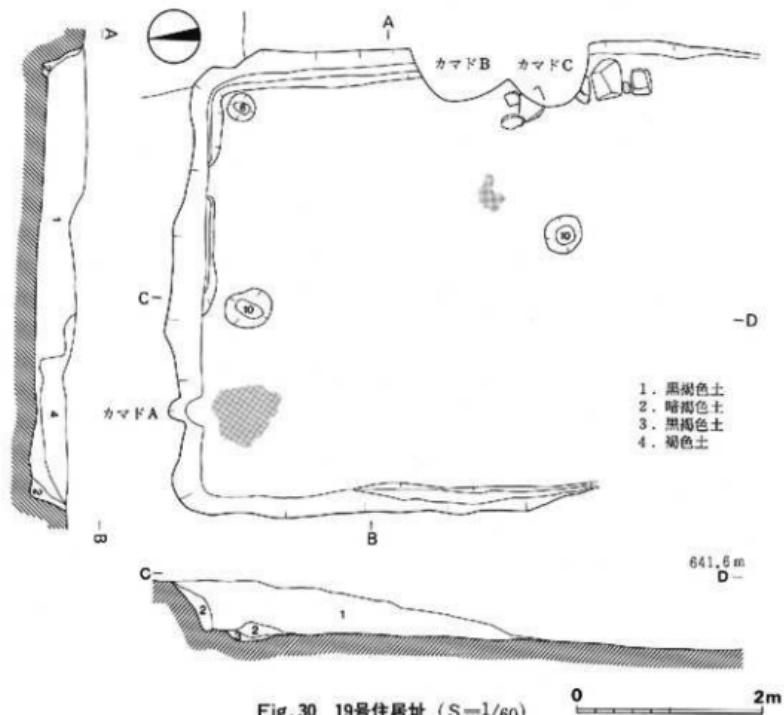


Fig. 30 19号住居址 (S-1/60)

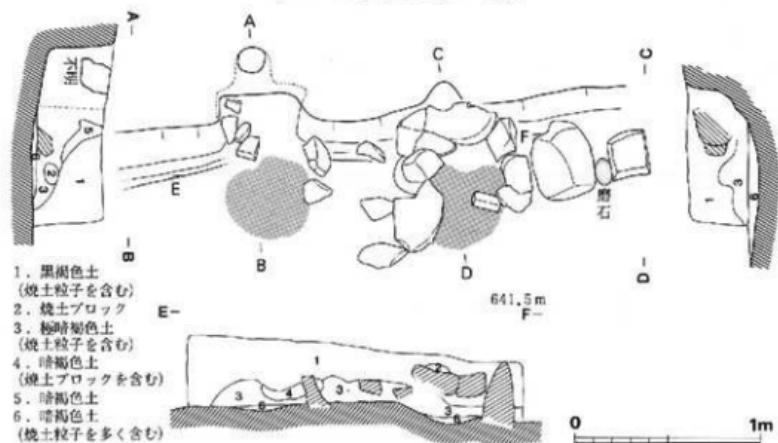


Fig. 31 19号住居址カマド (S-1/30)

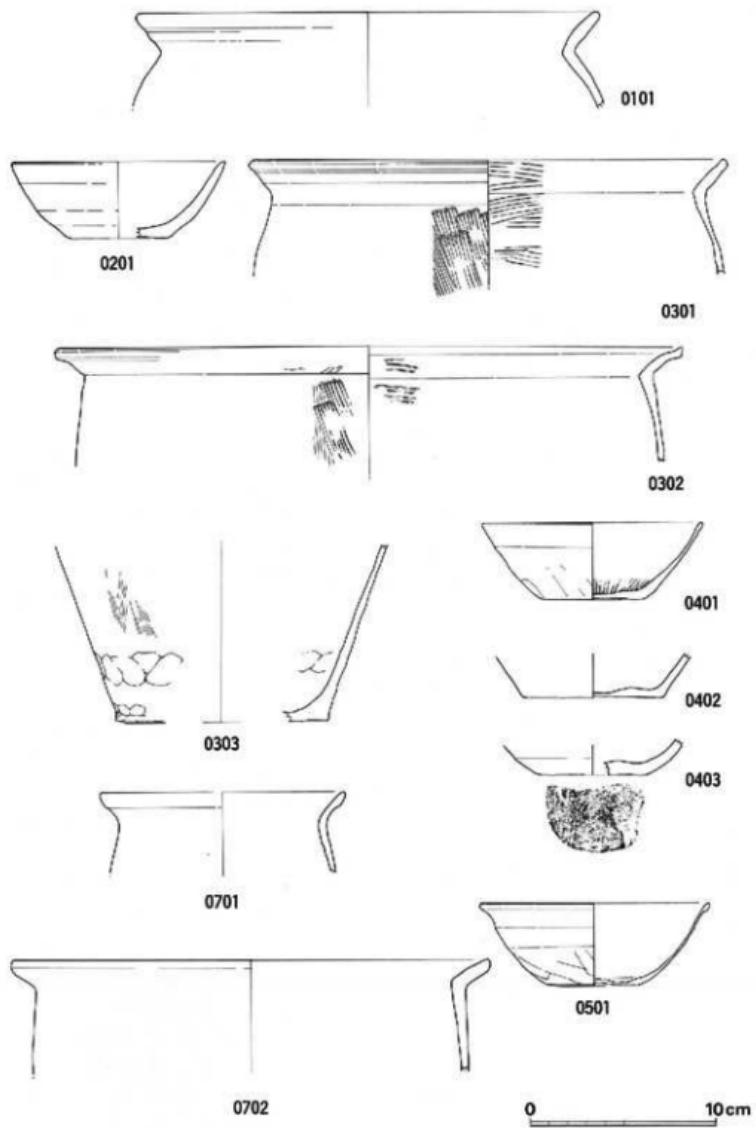


Fig. 32 出土土器 (1~5・7号住居址 S=1/3)

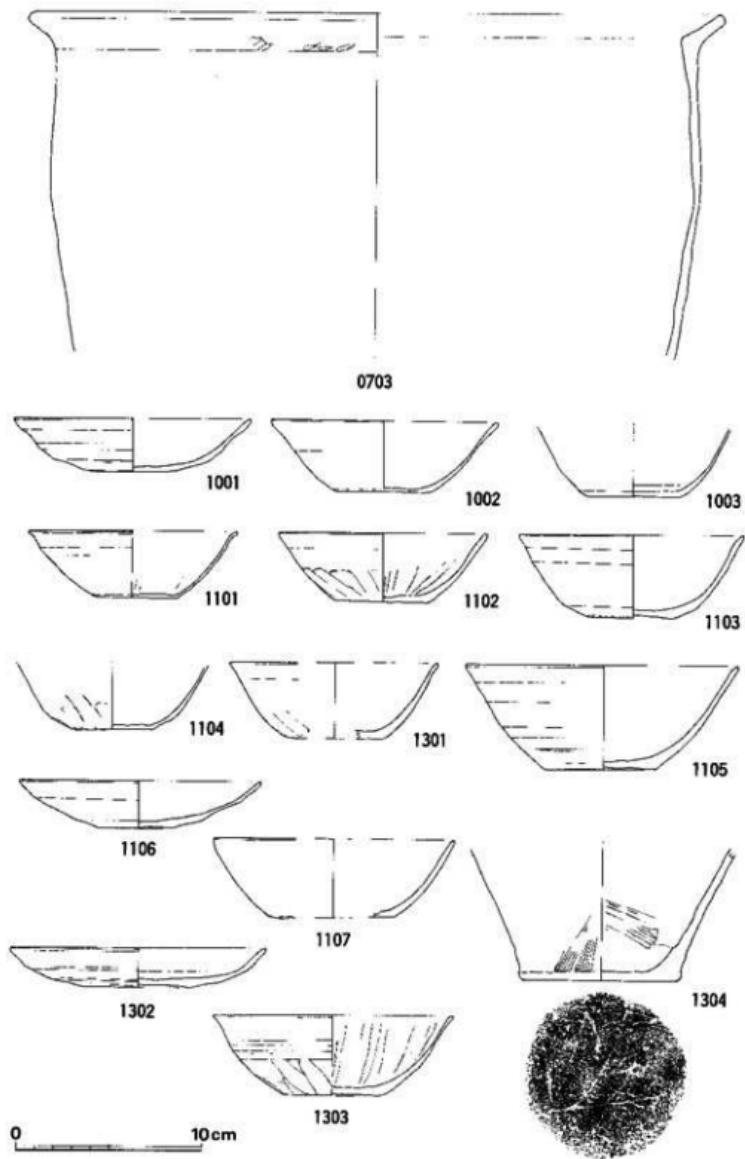


Fig. 33 出土土器 (7・10・11・13号住居址 S-1/3)

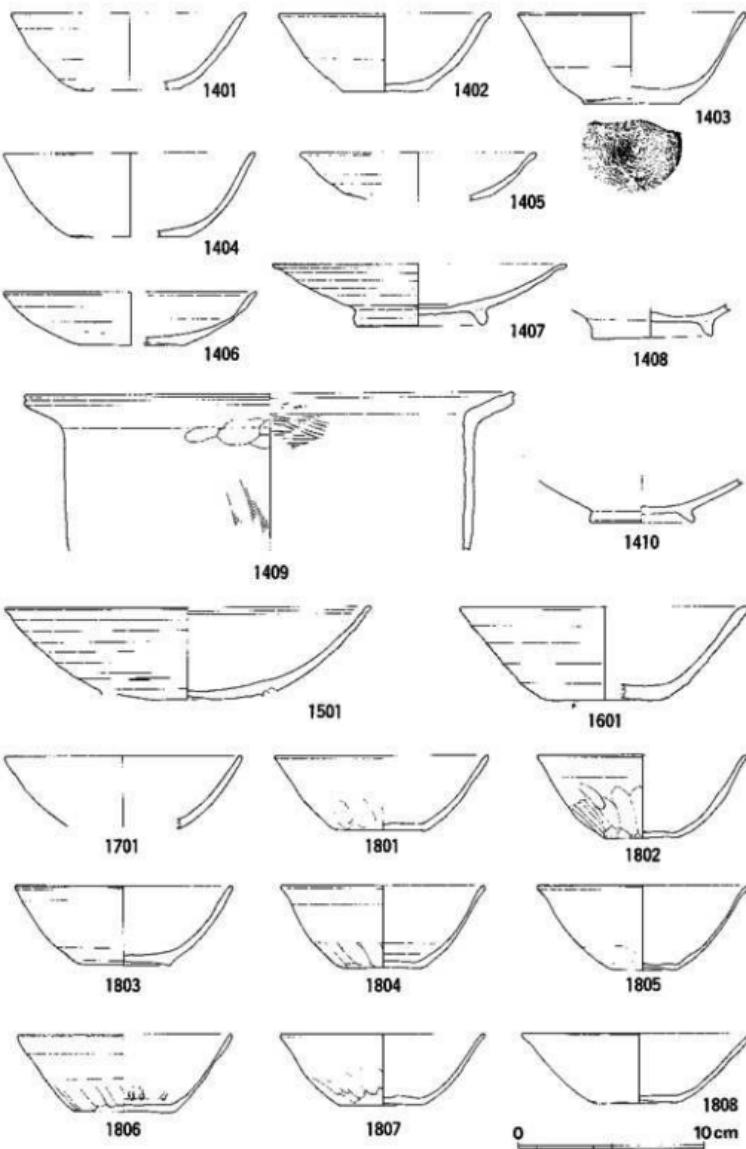


Fig. 34 出土土器 (14~18号住居址 S-1/3)

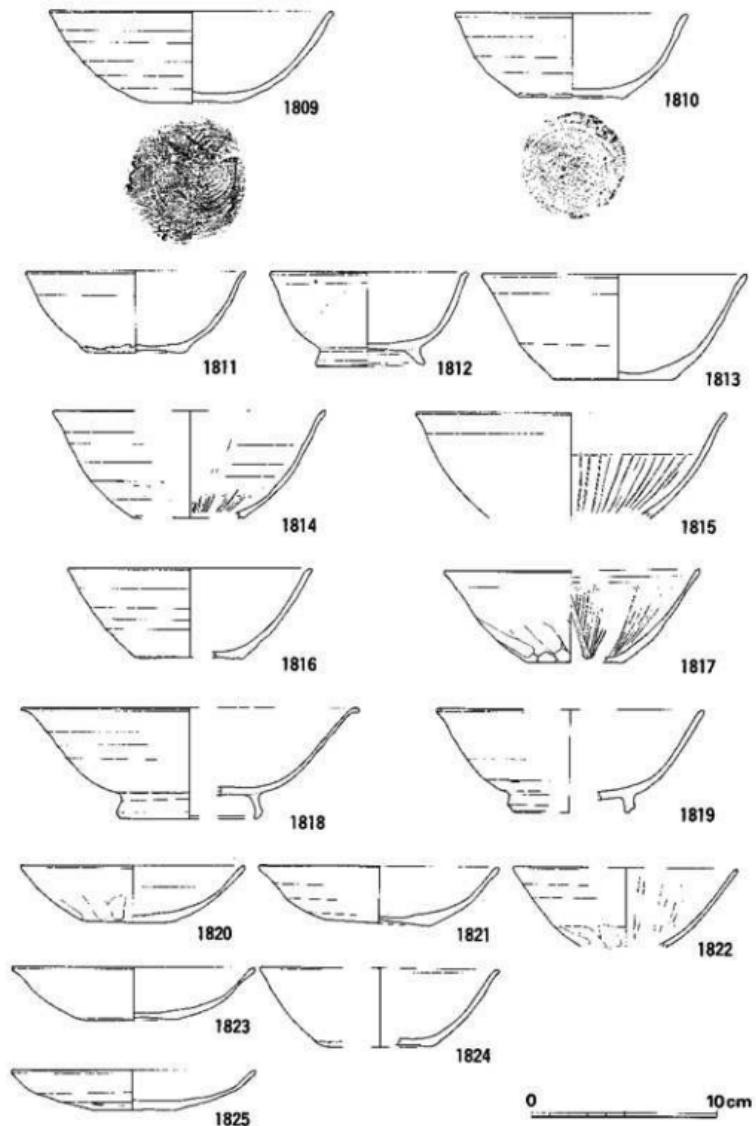


Fig. 35 出土土器 (18号住居址 S=1/3)

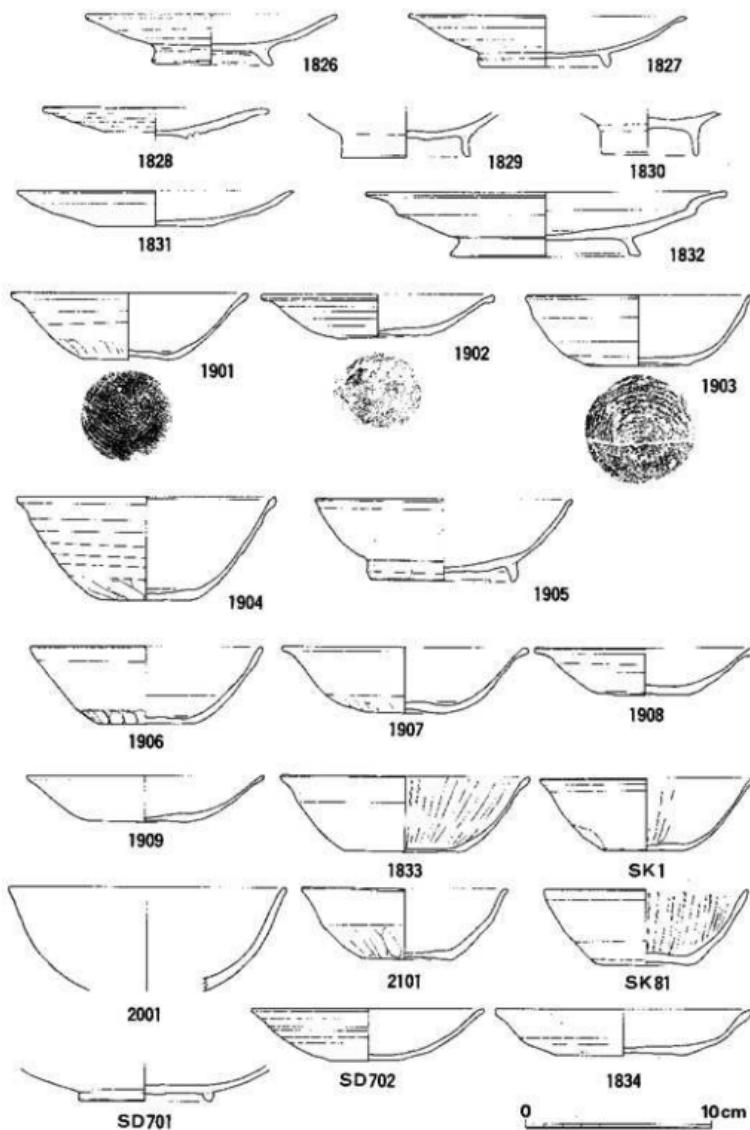


Fig. 36 出土土器 (18~21号住居址、1・89号土坑、7号溝 S=1/3)

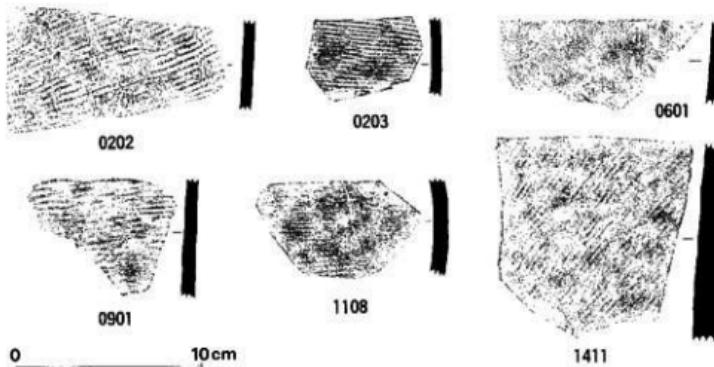


Fig. 37 出出土器 (2・6・9・11・14号住居址 S-1/3)

この様に粘土層中に底部を設けることは、隣接する中村道祖神遺跡（1989年調査）の地下式坑と同様である。そして、この地下式坑は、中村道祖神遺跡の分布の一部であった可能性がある。堅坑は2ヶ所ある。エレベーションポイントA側の堅坑から石円の破片(PL.17)が出土した。

第2項 土壙墓

古錢、骨が出土した28号土坑(Fig.39, PL.18)・59号土坑(Fig.43, PL.17)・60号土坑(Fig.39, PL.17)の3基の土坑を土壙墓と判断した。

28号土坑からは、天祐通寶（鑄造1017年）1枚と、破片で名称が不明のもの2枚、都合3枚出土した。59号土坑では、古錢が6枚出ている。内訳は、皇宋通寶（鑄造1039年）1枚、淳化元寶（鑄造990年）1枚、接着及び破片で不明のもの4枚。また、60号土坑からは、ほとんど粉のような状態になった骨と古錢が5枚出土した。古錢は、永樂通寶（鑄造1587年）1枚以外は接着及び表面の縁角で名称は不明である。

第4節 時期不明の遺構

第1項 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (Fig.40, PL.22)

掘立の規模は、東西3.8 m 南北4.6～5 m。各柱穴から遺物は出土しなかった。13号住居址と14号住居址の中間に位置する。

2号掘立柱建物跡 (Fig.41, PL.23)

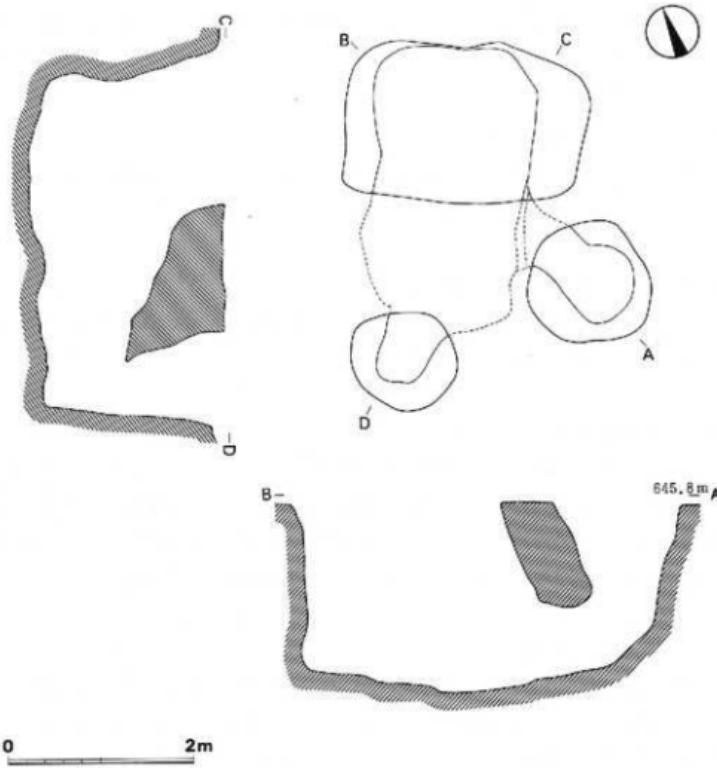


Fig. 38 1号地下式坑 ($S=1/60$)

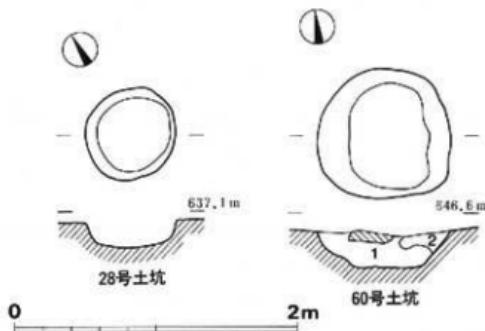


Fig. 39 土壤基 ($S=1/40$)

掘立の規模は、東西 6 m、南北 2 m。掘立の南側は削平されており柱穴があった可能性がある。各柱穴から遺物は出土しなかった。

第2項 ピット群 (Fig.43, PL.22)

柱穴状のピットがまとまりをもって検出された。しかし、中世の土塙墓（59号土坑）が群のなかに存在することもあり、建物跡の柱穴か否か判断しかねる。

第3項 土坑 (Fig.45~47, PL.18~21)

小ピット状のものも含め多くの土坑のうち21基を個別に図示したので参照していただきたい。これら以外については、遺構全体図にその位置を示すに止めた。

第4項 壺穴造構 (Fig.44, PL.23)

D—5・6グリッドで検出した。西側はすでに削平されていたが、方形プランになると思われる。底部は平坦で、ローム面から約 1 m ある。覆土の上部から中世の内耳土器破片が出土した。本遺構の近くに中世の地下式坑があることや、隣接する中村道祖神遺跡で地下式坑が45基発見されたので、中世の住居址等を考慮に入れて調査をしたが確証は得られなかった。

第5項 溝 (PL.23・24)

溝は 6 本発見された（3 号溝は欠番）。写真と遺構全体図にその位置を示したので参照していただきたい。7 号溝から須恵器（注 1）と土師器（注 2）が出土したが、これらは18号住居址との重複の結果、18号住居址の遺物が混入したものと考えられる。

（注 1）Fig.36—SD701：須恵器皿。内側に釉がかかっている。（注 2）Fig.36—SD702：土師器壺。

第6項 焼土

12ヶ所の焼土は遺構全体図にその位置を示すに止めた。焼土のなかには田普請時の焚火でできたものも含まれていると思われる。

註：平安時代の土器区分（坂本・末木・堀内1983による）

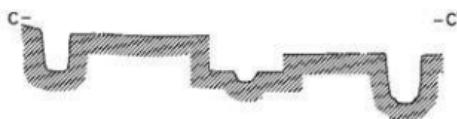
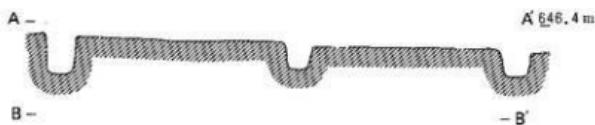
VII期：9世紀第4四半期

XI期：10世紀第3四半期

IX期：10世紀第1四半期

XII期：10世紀第4四半期

X期：10世紀第2四半期



0 2m

Fig. 40 1号掘立柱建物跡 ($S=1/60$)

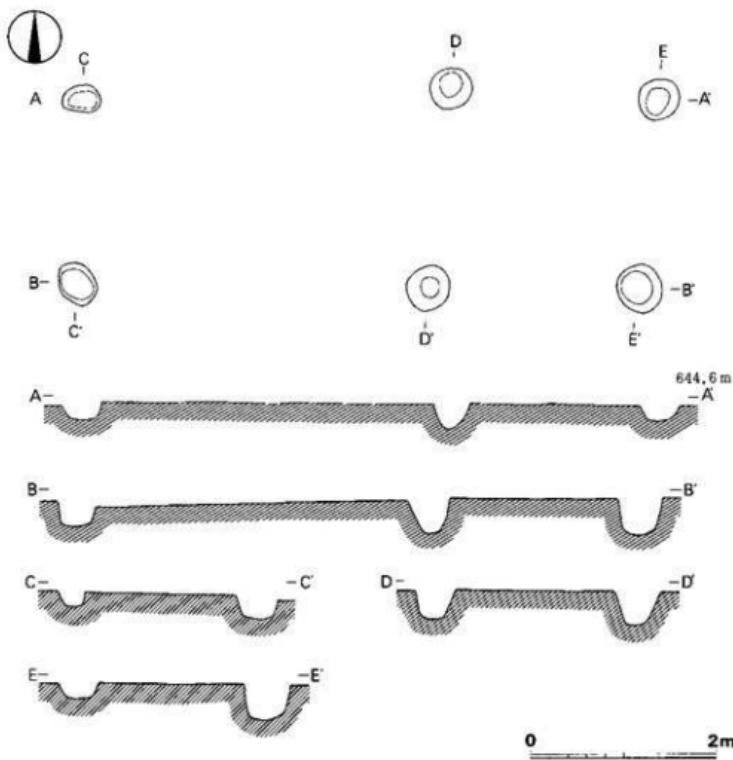


Fig. 41 2号据立柱建物跡 (S=1/60)



Fig. 42 土壙墓出土古銭 (S=1/1)

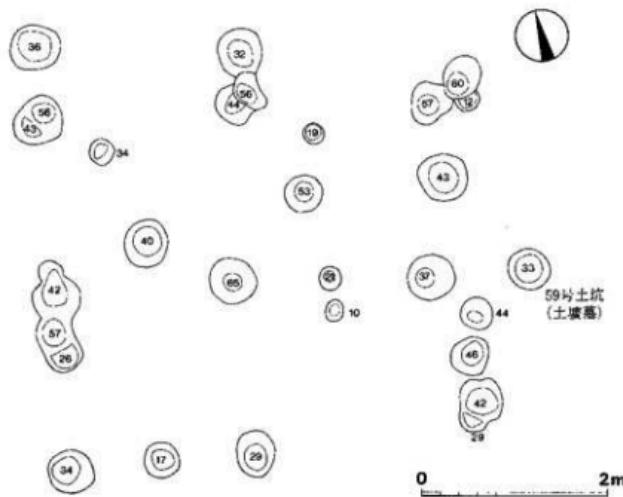


Fig. 43 ピット群 ($S=1/60$)

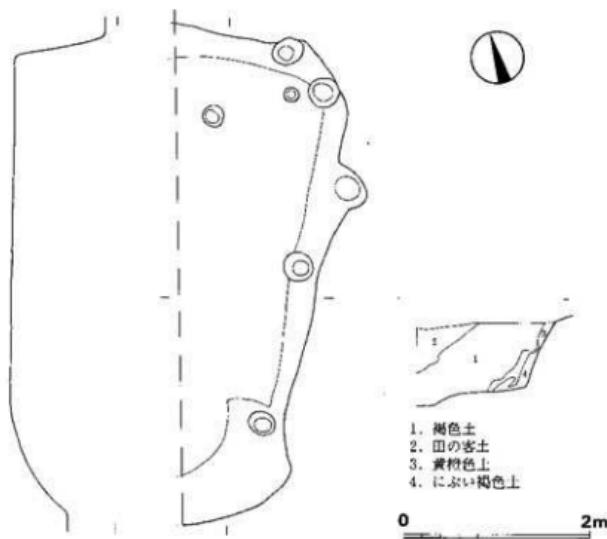


Fig. 44 積穴造構 (水糸高: 645.5m) ($S=1/60$)

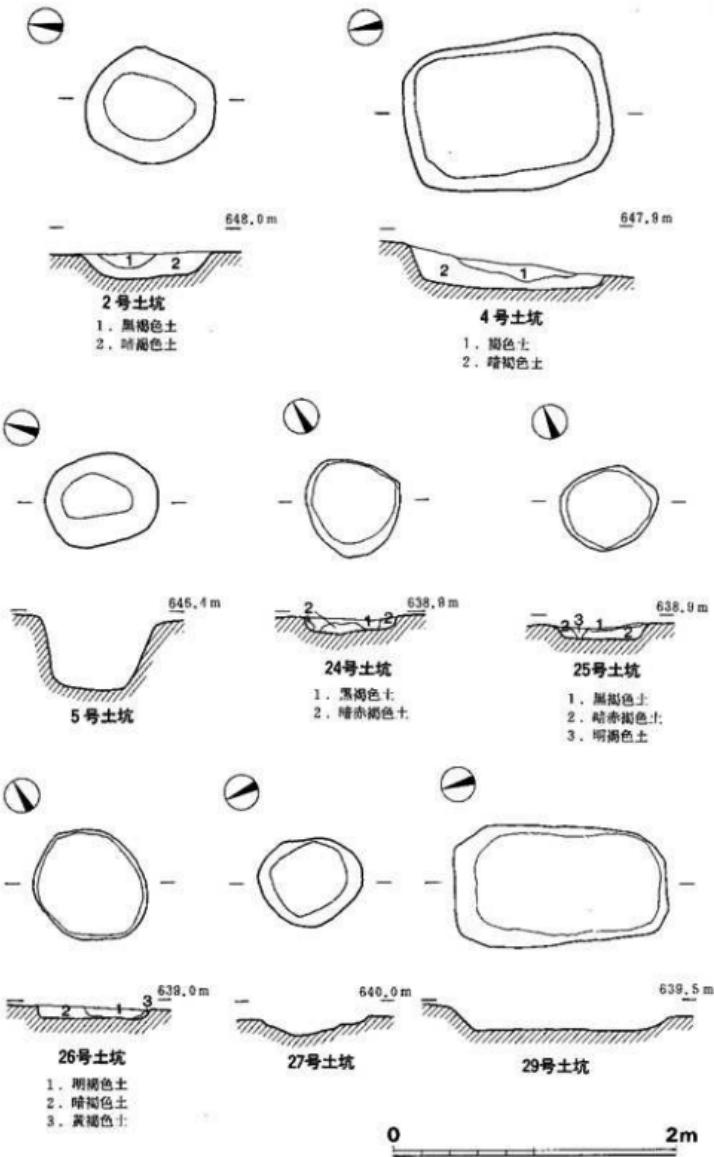


Fig. 45 土坑

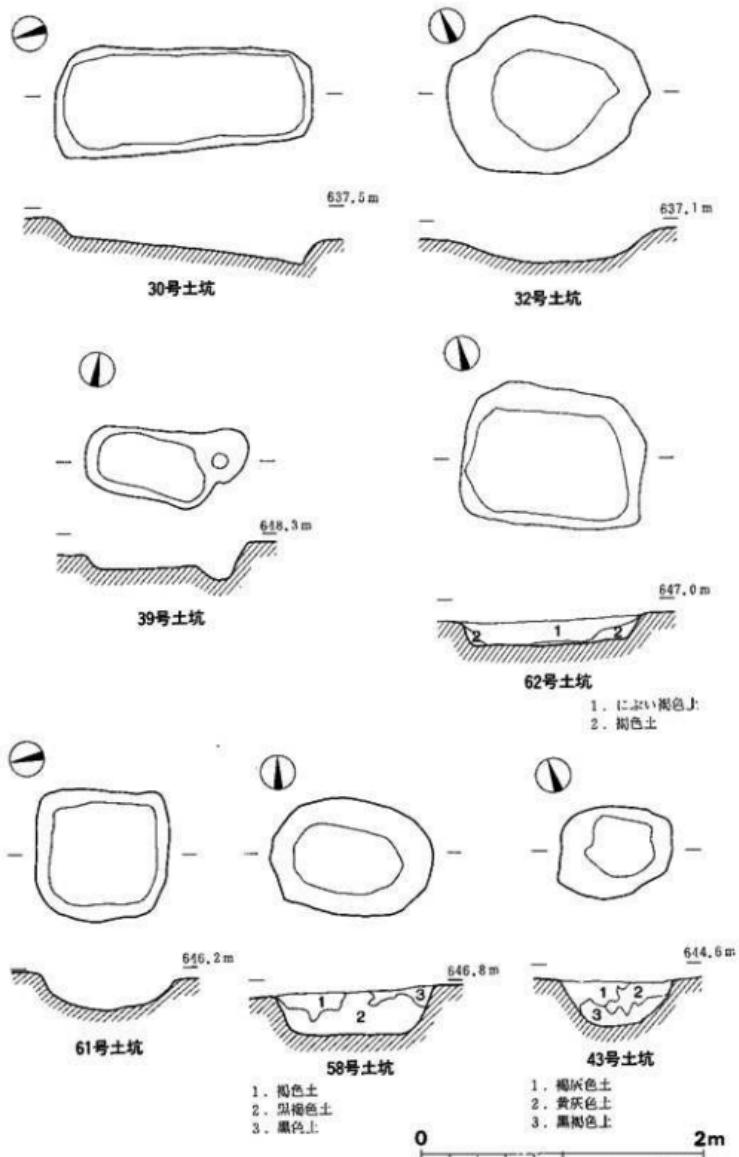


Fig. 46 土坑

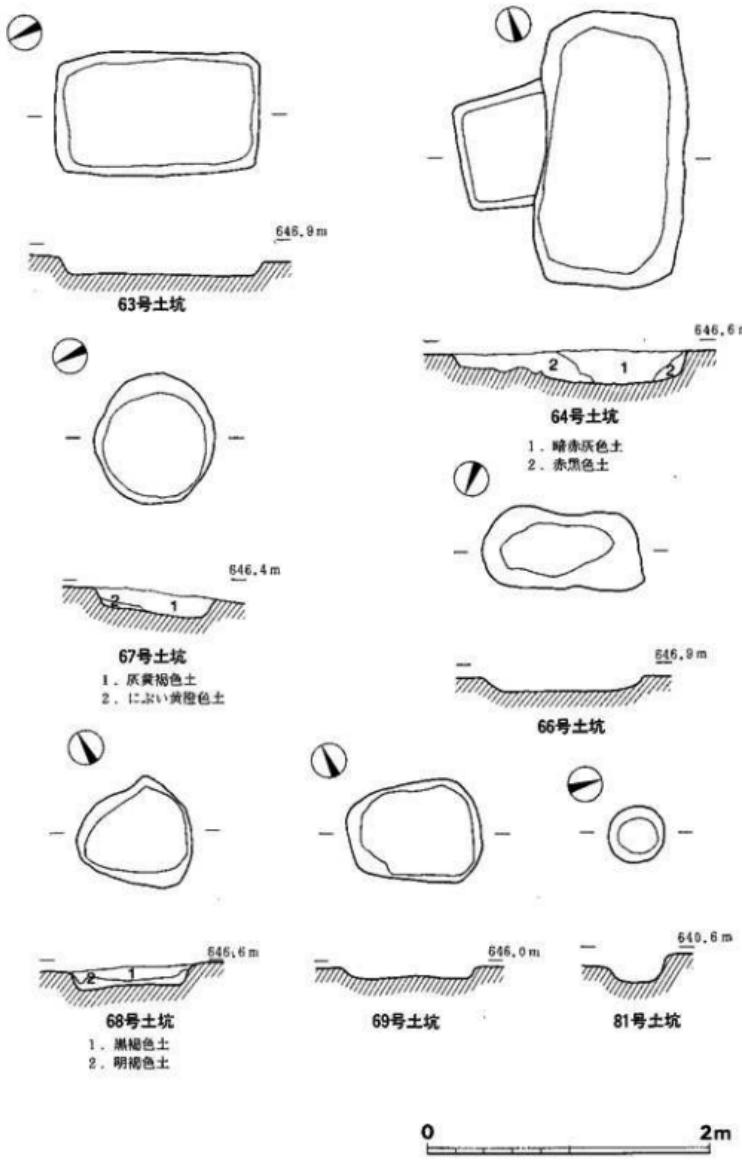


Fig. 47 土坑

第3章 浦田遺跡の調査



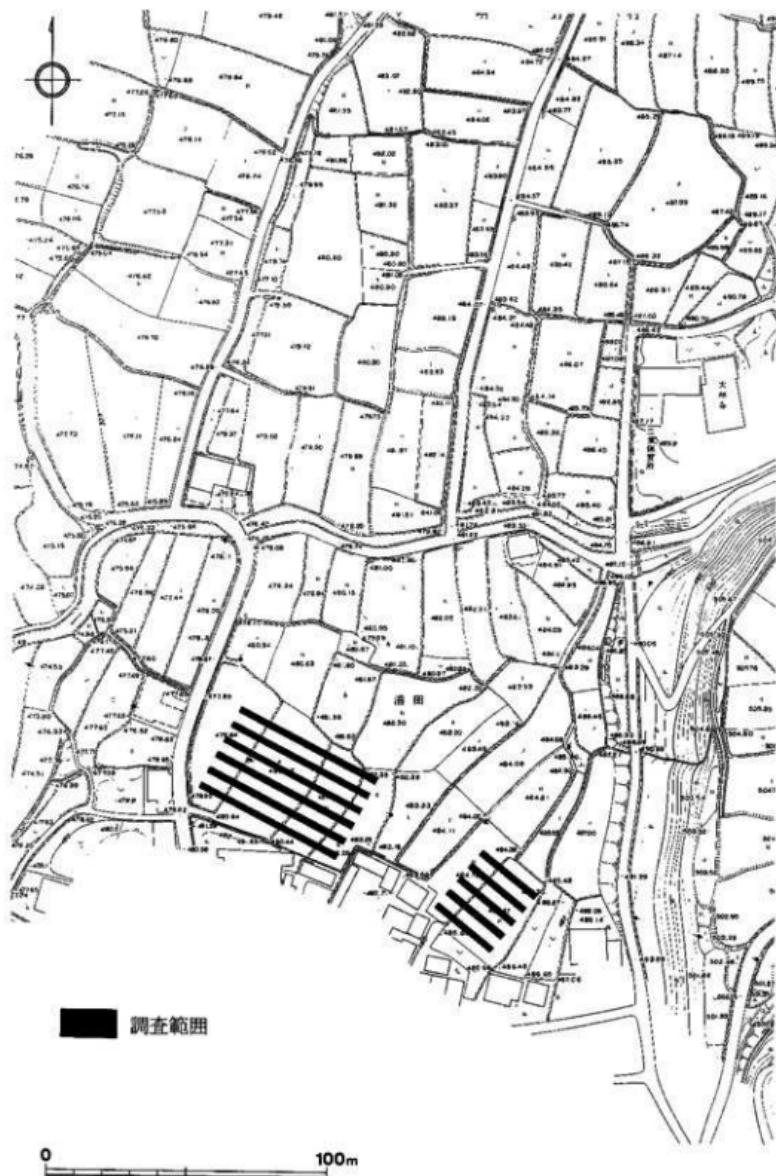


Fig. 48 浦田遺跡調査範囲 (1/2000)

調査の概要

浦田遺跡は、1989年12月に行なった埋蔵文化財所在確認調査によって新たに発見された遺跡である。1990年の本調査では、確認調査の結果を参考にして所謂トレンチ発掘の形態をとった。幅2m、長さ25mのトレンチを4mおきに5本、幅2m、長さ55mのトレンチを4mおきに6本設けて遺構・遺物の検出を試みた結果、縄文土器が出土したが、遺構は発見されなかった。発見された土器の主なものは写真図版(PL.26)で示した。

参考文献

- 江崎 武 1985 「中世地下式墳の研究」『古代探査II』早稲田大学出版会
人森隆志 1990 「千野木I・II遺跡・池の下遺跡・踏石II遺跡・中村道祖神遺跡」明野村教育委員会
坂本美夫・末木 健・堀内 真 1983 「集落址出土土器の編年と背景III甲斐地域」『奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古第14号
坂本美夫 1989 「甲斐型壺—編年について(I)ー」『山梨考古学論集II』山梨県考古学協会
平野 修 1988 「宮間田遺跡」武川村教育委員会

付編 宮後遺跡の砂粒組成・重鉱物組成

会田 信行

1.はじめに

茅ヶ岳西麓には塩川沿いに3段の明瞭な河岸段丘が発達している。宮後遺跡はこのうち小池平面（比高60m）と呼ばれる中位段丘面上に位置している。小池平面は層厚1~2mの小池平疊層（八ヶ岳団体研究グループ1988）とその上位のローム層からなり、そのローム層には中部～関東地方の広域テフラとして有名な御岳Pm-1A軽石層（7~9万年前）が含まれるとされている。今回、疊層より上位の土層（厚さ約2.6m）について、その砂粒組成と重鉱物組成を求めたので、その結果を報告する。

2. 土層の層序

Fig.50に本遺跡の土層断面図を示す。これは発掘担当者が作成したものである。色調・構成物質等の観察結果と本遺跡と約100m離れたところにある中村道祖神遺跡の土層断面（1990年に報告済）を参考に、I層からVIII層まで区分される。各土層は次のように説明されている。

- 1：田の耕作土
- 2：田の床土
- 3：7.5YR3/4 暗褐色土
- I：7.5YR4/6 褐色ローム
- II：10YR4/6 褐色ローム（I層よりも明るい）
- III：10YR4/6 褐色ハードローム（I層よりもやや明るい。ローム層中に白色の粒子を多く含む）
- IV：10YR6/8 Pm-1A軽石層（水分を多く含む。乾燥すると白くなる）
- V：10YR8/3 浸黄橙粘土層（Pm-1Aの粘土化したもの）
- VI：10YR5/6 黄褐色粘土層（Pm-1Aの粘土化したもの）
- VII：2.5YR6/1 黄灰色粘土層
- VIII：疊層（小池平疊層）

3. 採取試料と分析方法

分析用試料としてI層（試料番号1~6）、II層（試料番号7~11）、III層（試料番号12~15）、IV層（試料番号16~22）、V層（試料番号23~24）、VI層（試料番号25）、VII層（試料番号26~28）から計28個を採取した（Fig.50）。

採取した試料は水洗いし、粘土分を除去した後、乾燥器（40℃）で乾燥させる。乾燥後の残渣を100メッシュ（0.15mm）と200メッシュ（0.074mm）のフルイで篩分する。このうち0.074~0.15

mmの砂粒をカナダパルサムを用いて、スライドガラスに封入する。

スライドガラスに封入した砂粒を、偏光顕微鏡を用いて砂粒1粒づつ鑑定する（主に10×10倍で検鏡）。その際メカニカルステージを用いて、等間隔線上の砂粒のみを対象とした。

4. 分析結果

Fig. 49に分析結果を示した。以下に項目ごとに特徴を述べる。

(1) 砂粒組成

砂粒の鑑定数は試料により差はあるが、No.21の1809個（最多）からNo.26の447個（最少）であった。数えた砂粒を重鉱物（有色鉱物）、軽鉱物（無色鉱物）、火山ガラス、岩片の4種に分け、百分率（粒数%）で示した。

I～III層のローム層では、①全体的に下位の層準ほど重鉱物の含む割合が小さくなる。逆に軽鉱物の含む割合は大きくなる。②火山ガラスは全体に僅かに含むが、I層の最上部で多く含む、といった傾向が認められる。

V、VI層はほぼ似た傾向を示すほか、IV、VII層とも土層単位で特徴があらわれている。

以下に、土層ごとに説明する。

I層（No. 1～7）：重鉱物25～34%、軽鉱物47～61%、火山ガラス1～5%、岩片10～16%である。岩片は白色のものが多く含まれる。火山ガラスはNo. 1～3で多く含む（4～5%）。そこではバブルウォール型のものがほとんどであるのに対して、No. 4以下のものにはバブルウォール型は少ない。

II層（No. 8～11）：重鉱物14～28%、軽鉱物59～77%、火山ガラス1～2%、岩片7～11%である。

III層（No. 12～15）：No. 15は試料のはほとんどがIV層の軽石からなるため、IV層に含める。No. 12～14では重鉱物12～17%、軽鉱物72～77%、火山ガラス1～4%、岩片9～12%である。No. 14で火山ガラスを多く含むが、これは試料に含まれるIV層の軽石からもたらされたものである。

IV層（No. 16～22）：重鉱物3～7%、軽鉱物45～68%、火山ガラス6～25%、岩片11～26%である。火山ガラスはほとんどがバブルウォール型である。No. 22は粘土化の著しい軽石である。

V層（No. 23～24）：No. 23は粘土、No. 24は粘土化した軽石である。重鉱物7～12%、軽鉱物74～78%、火山ガラス1～2%、岩片13%である。

VI層（No. 25）：重鉱物13%、軽鉱物76%、火山ガラス1%、岩片11%である。

VII層（No. 26～28）：重鉱物25～27%、軽鉱物57～62%、火山ガラス1%以下、岩片13～16%である。No. 26に褐鐵鉱が含まれている。

(2) 重鉱物組成

砂粒組成で示した重鉱物について、カンラン石、シソ輝石、普通輝石、酸化角閃石、普通角閃

石、不透明鉱物、黒雲母、ジルコン、その他(不明鉱物を含む)の9種類に分け、百分率(粒数%)を求めた。

この中で、黒雲母は、I～VI層の試料中に多く含まれ、特にV、VI層に多く含まれていたが、試料処理の過程で水に流れやすく、統計上正しく表現されないものもある。ジルコンはIV層の軽石に特徴的に含まれるが、本遺跡の土層全体に僅かに認められる。その他とした鉱物はI～III層に見られるもので、ほとんどが赤色～暗赤色の鉱物である。カントン石はNo.4でのみ確認された。

以下に、土層ごとに説明する。

I層：不透明鉱物が最も多く含まれ、35% (No. 1) ~ 70% (No. 6) を占める。残りがシソ輝石 > 普通角閃石 > 普通輝石 & 酸化角閃石である。不透明鉱物とシソ輝石の量比に負の相関関係がみられる。

II、III層：不透明鉱物が62~75%含まれ、残りはシソ輝石 > 普通角閃石 > 酸化角閃石 & 普通輝石である。

IV層：普通角閃石が最も多く、34~48%である。不透明鉱物は22~36%であり、また酸化角閃石はみられない。他に黒雲母、ジルコンを特徴的に含むので、Pm-1A 軽石に確実に対比される。

V層：試料により、重鉱物組成に差がある。No.24は粘土化した軽石であること、酸化角閃石を含まないこと、などからIV層に含めてよい。No.23は不透明鉱物 > 酸化角閃石 > 普通角閃石 > 普通輝石である。

VI層：不透明鉱物 > 普通角閃石 > 酸化角閃石 > シソ輝石である。

VII層：酸化角閃石 > 普通角閃石 > 不透明鉱物 > 輝石で、角閃石類が68~90%を占める。

5. 考察

(1) 他の遺跡との比較

筆者が同じ方法で分析した遺跡に、白山I遺跡(会田1989)、中村道祖神遺跡(会田1990)がある。中村道祖神遺跡は本遺跡と同じ地形面上にあり、約100 m 程離れている。違いは標高が本遺跡のはうが17 m ほど高い。白山I遺跡と中村道祖神遺跡の対比は報告されている(会田1990)、本遺跡と中村道祖神遺跡の対比を試みる。

I～III層のローム層は厚さもほぼ同じであり、また砂粒組成・重鉱物組成の特徴も一致する。同様にV・VI層 (No.23, 28)、VII層はそれぞれ中村道祖神遺跡のV層、VI層に対比される。

Fig.51に本遺跡と中村道祖神遺跡、白山I遺跡の対比を示した。I層の厚さが3遺跡でほぼ同じであること、I層が下位のローム層を削っていることから、I層とそれ以下のローム層とは不整合関係にあると言える。

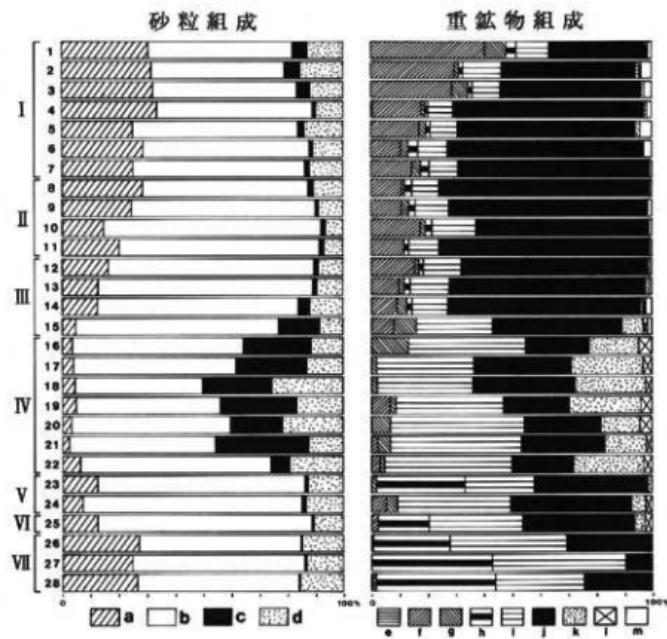
(2) 火山ガラスの対比

I層の最上部 (No. 1 ~ 3) にバブルウォール型の火山ガラスが多く含まれている。中村道祖神

遺跡では不明瞭であったが、白山 I 遺跡でも I 層に対比される III～V 層 (No. 1～5) に同じタイプの火山ガラスが多く含まれている。屈折率の測定などをしてみないと確実なことはいえないが層序から約 2 万年前に降灰した始良・丹沢火山灰 (AT) 起源の火山ガラスの可能性が高い。

参考文献

- 会田信行 1989 「白山 I 遺跡の砂粒組成・重鉱物組成」「踊石遺跡・薬師堂遺跡・白山 I 遺跡」 p.46～50.
- 会田信行 1990 「中村道祖神遺跡の砂粒組成・重鉱物組成」「千野木 I・II 遺跡・池の下遺跡・踊石 II 遺跡・中村道祖神遺跡」 p.102～106.
- 八ヶ岳団体研究グループ 1988 「八ヶ岳山麓の上部更新統」「八ヶ岳山麓の第四系」地団研専報 34 p.91～109.



a: 重鉱物 b: 軽鉱物 c: 火山ガラス d: 岩片 e: カンラン石 f: シン輝石 g: 普通輝石
h: 酸化角閃石 i: 普通角閃石 j: 不透明鉱物 k: 黒雲母 l: ジルコン m: その他

Fig. 49 分析試料の砂粒組成と重鉱物組成

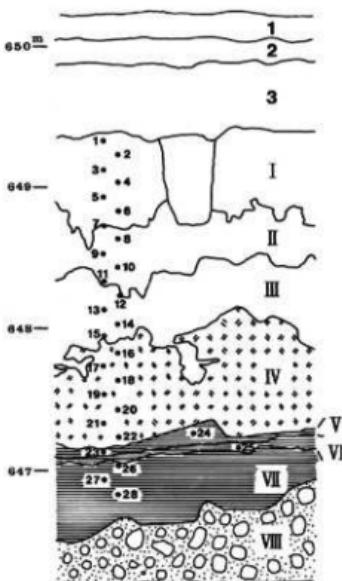


Fig. 50 分析試料採取位置

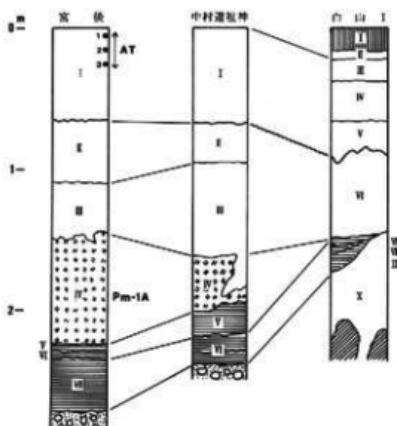
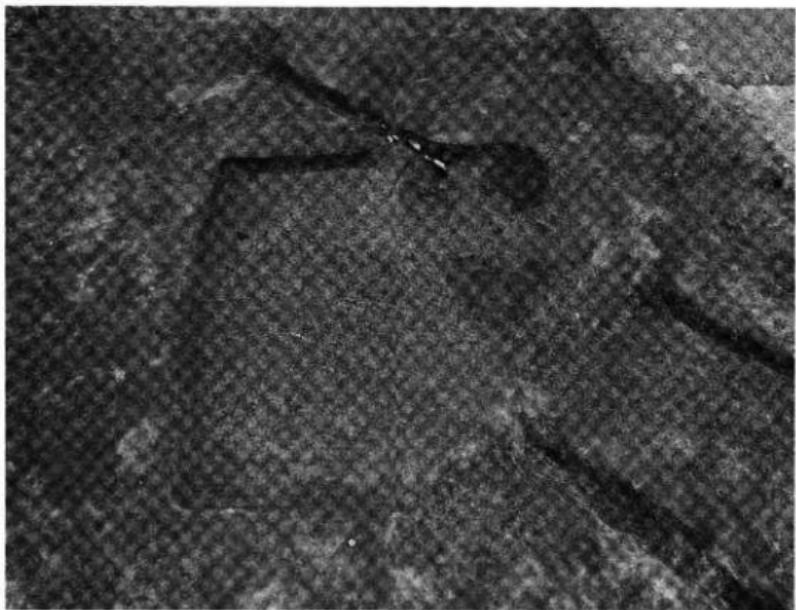


Fig. 51 宮後遺跡と中村道祖神遺跡・白山I遺跡の対比

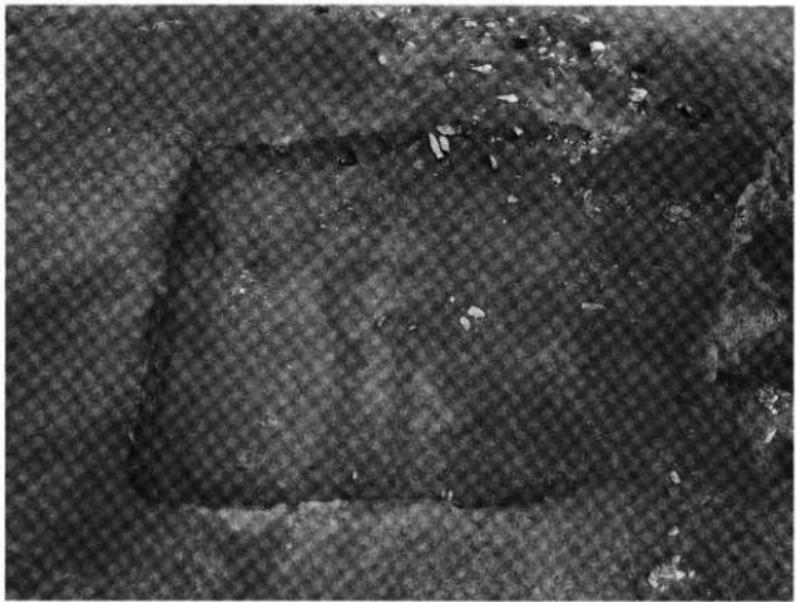
写 真 図 版



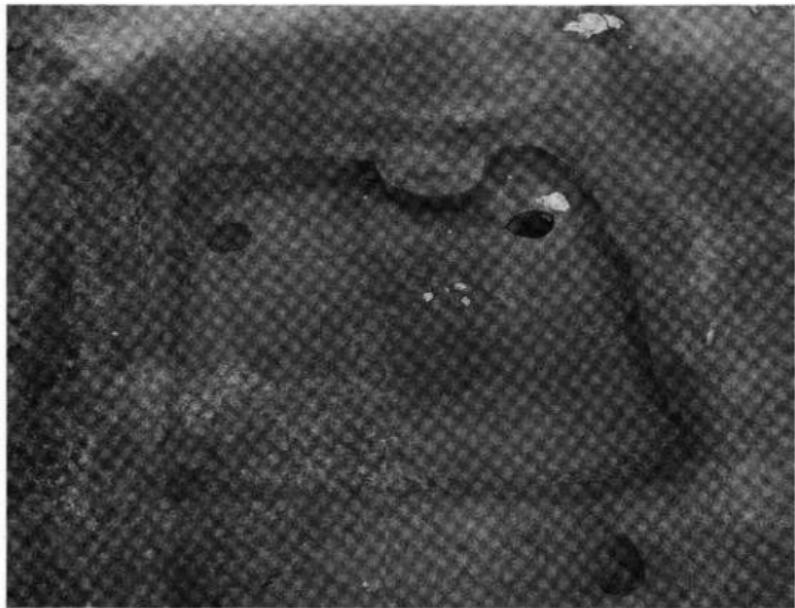
遺跡の位置



1号住居址



2号住居址



3号住居址



3号住居址カマド



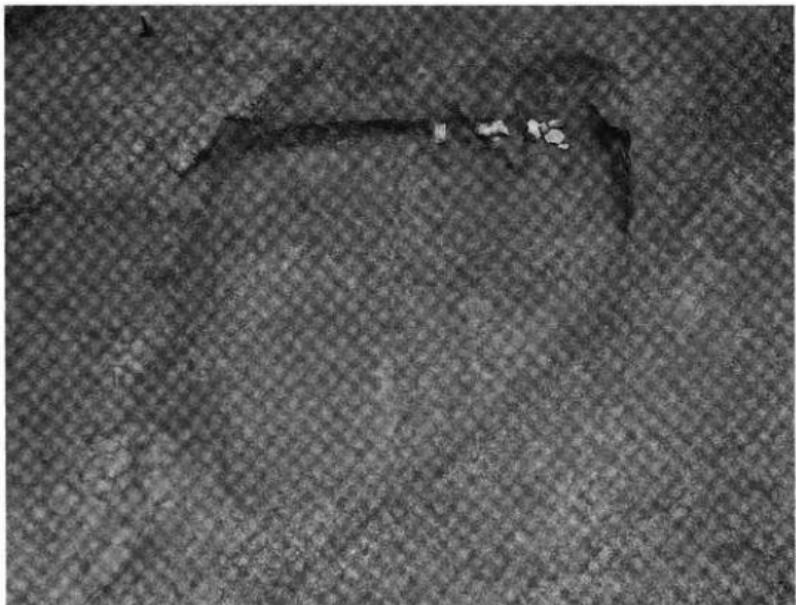
3号住居址調査風景



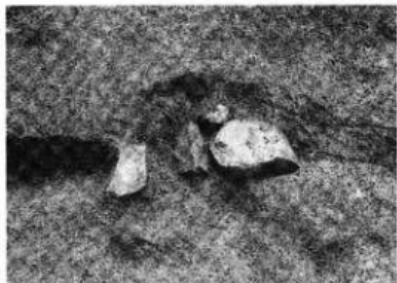
4号住居址



4号住居址調査風景



5号住居址



カマド



出土土器 0501



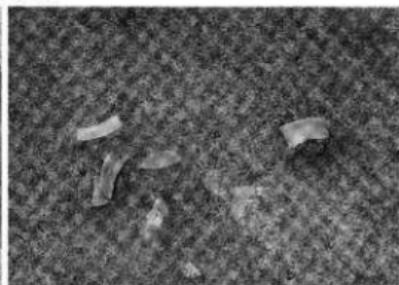
遺物出土状況(南東コーナー)



6号住居址



6号住居址カマド(中央は支脚)



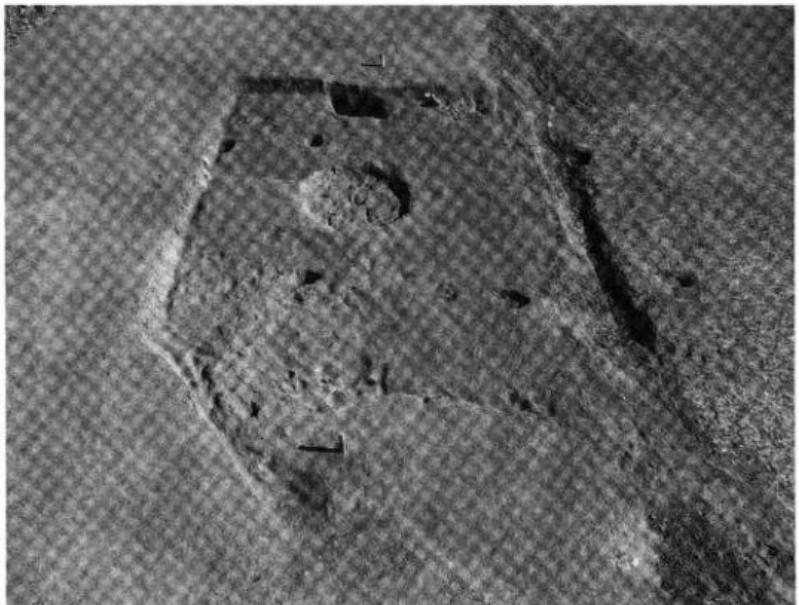
7号住居址遺物出土状況



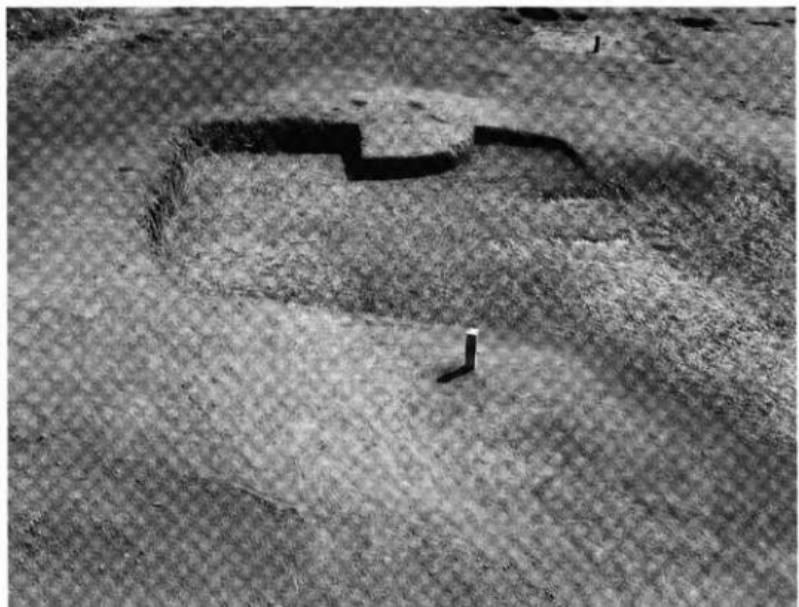
6号住居址調査風景



8号住居址



9号住居址



10号住居址



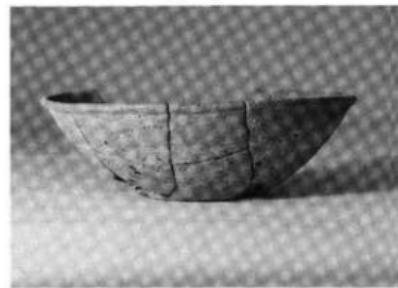
11号住居址



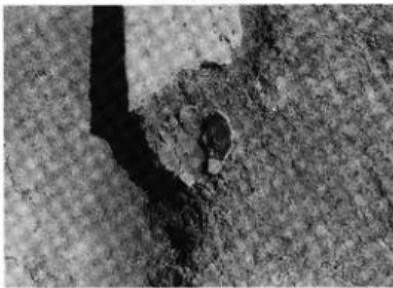
カマド



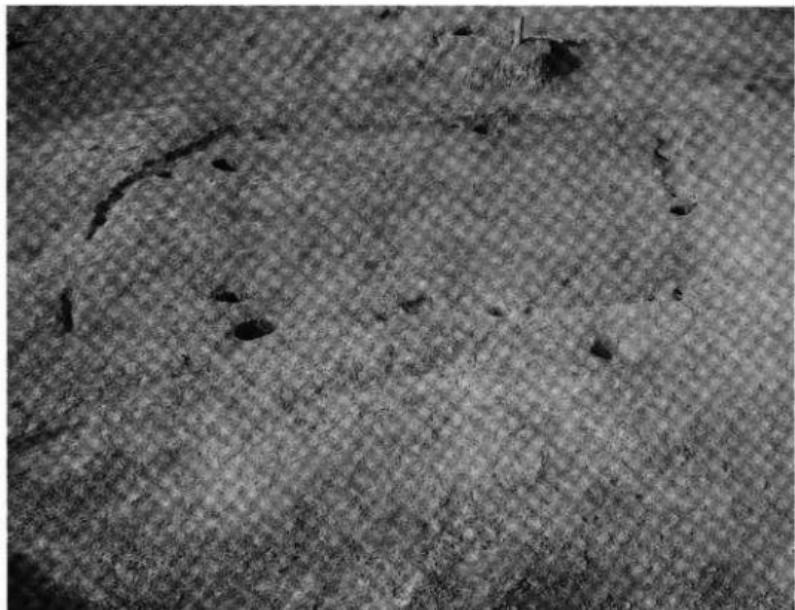
裸出土状況



出土土器 1101



土器出土状況



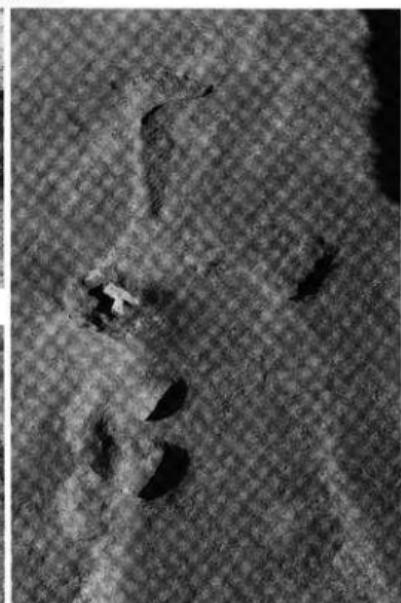
12号住居址



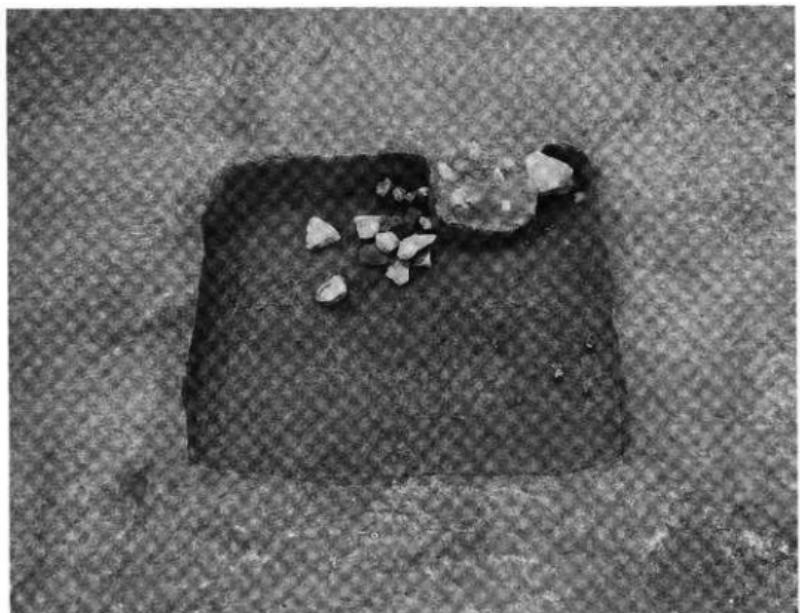
15号住居址



16号住居址



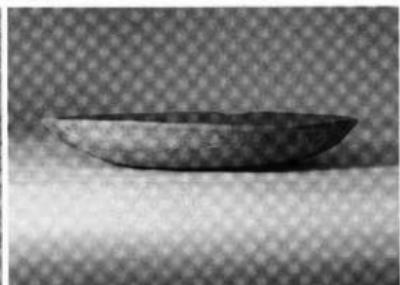
20号住居址



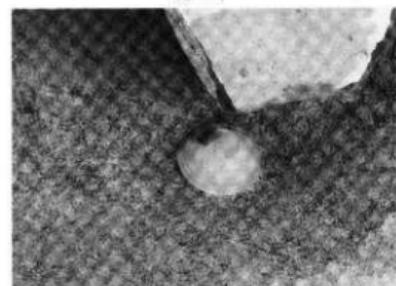
13号住居址



カマド



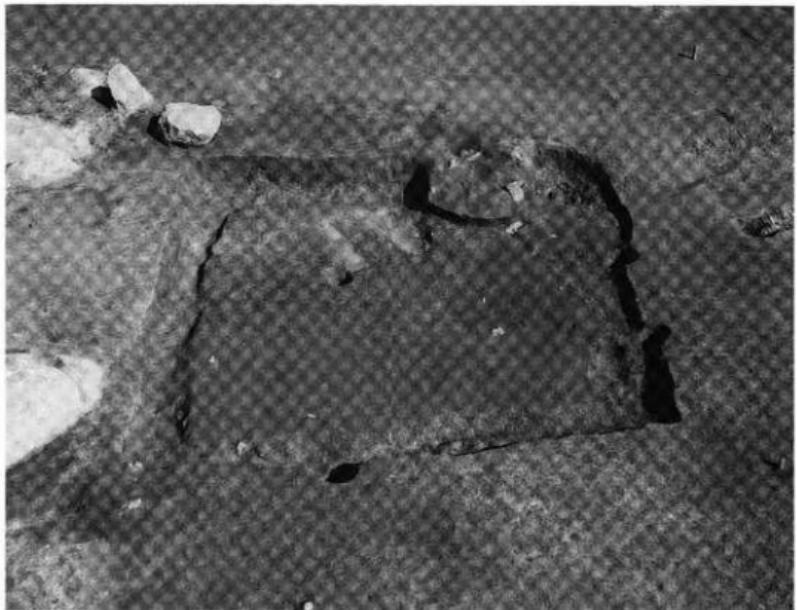
出土土器 1302



土器出土状況



出土土器 1303



14号住居址



カマド



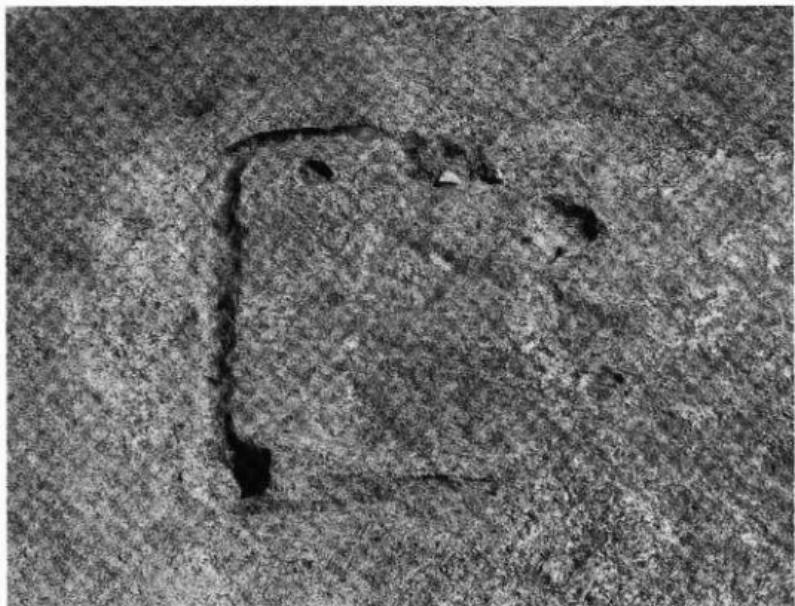
カマド支脚・敷石



出土土器 1407



調査風景



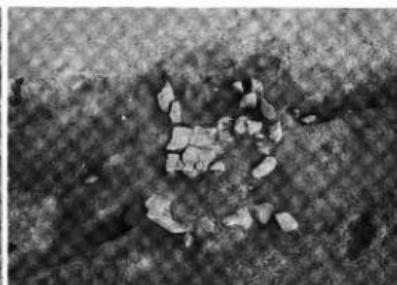
17号住居址



18号住居址



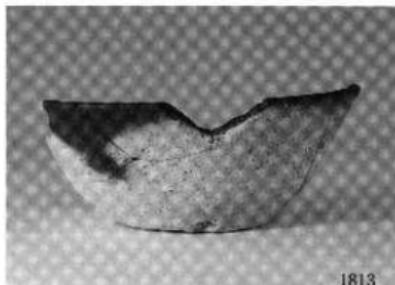
18住カマドA



18住カマドB



カマドB敷石



1813



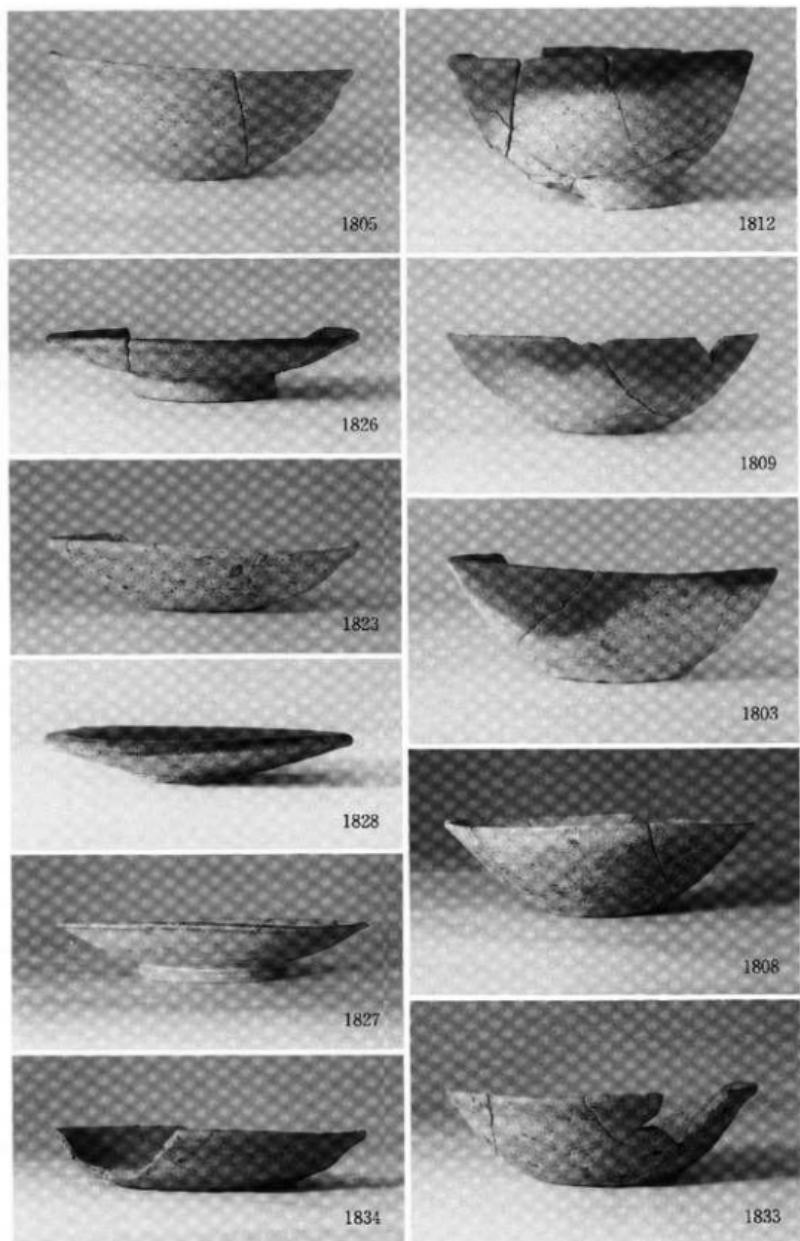
1806



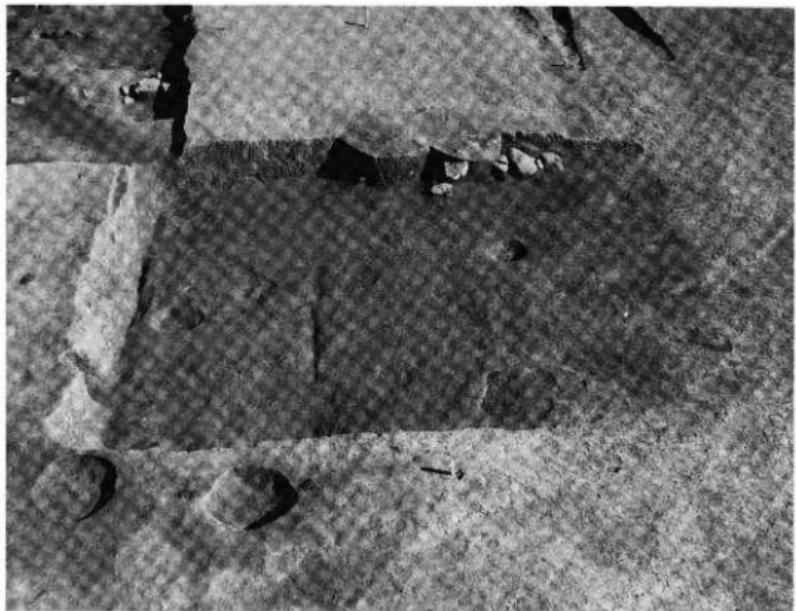
1817



1811



18号住居址出土土器



19号住居址



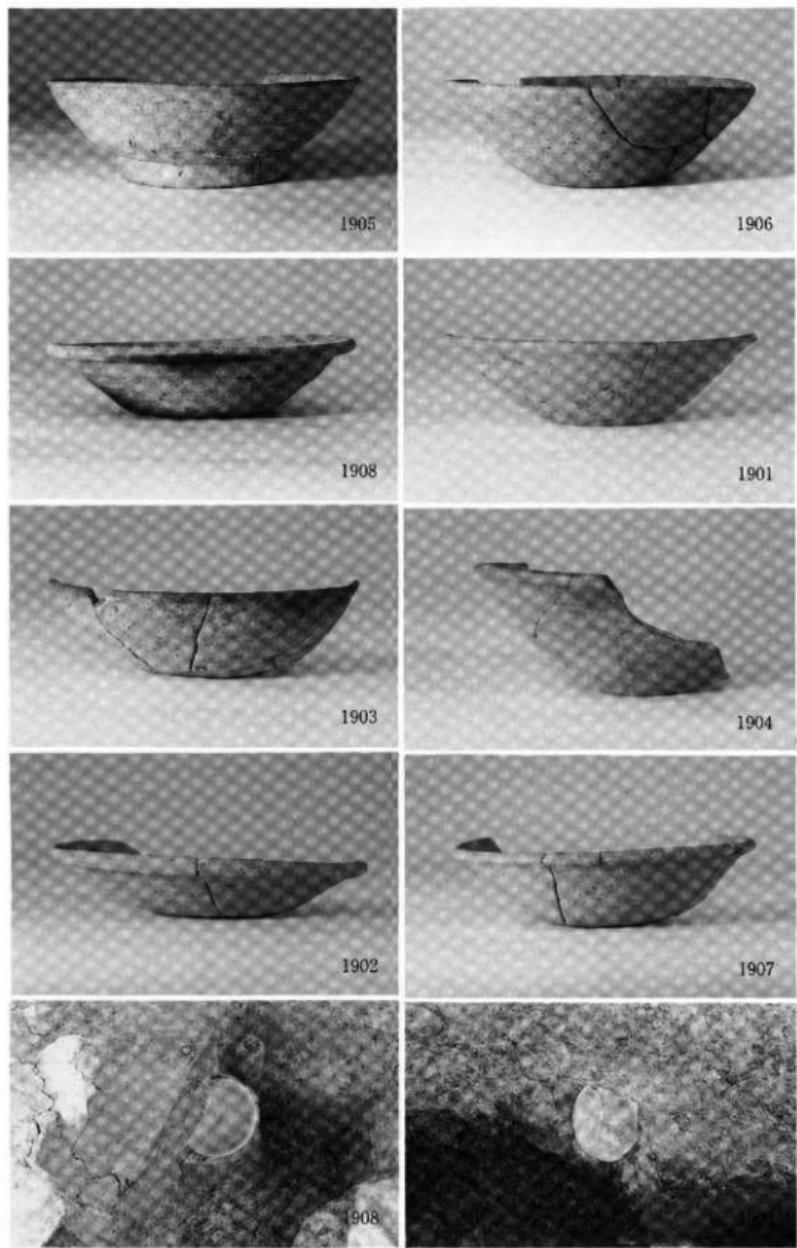
カマドB (左)・C (右)



カマドB 煙道



調査風景

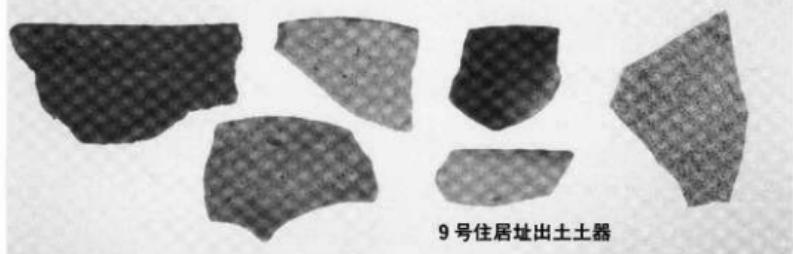


土器出土状況

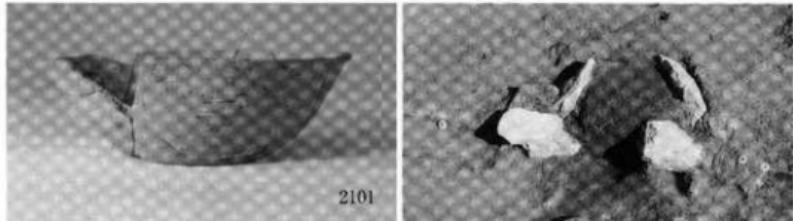


6号住居址出土土器

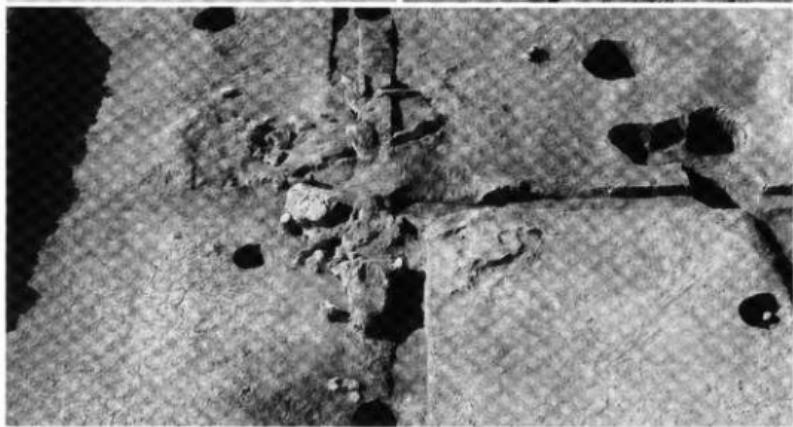
8号住居址出土土器



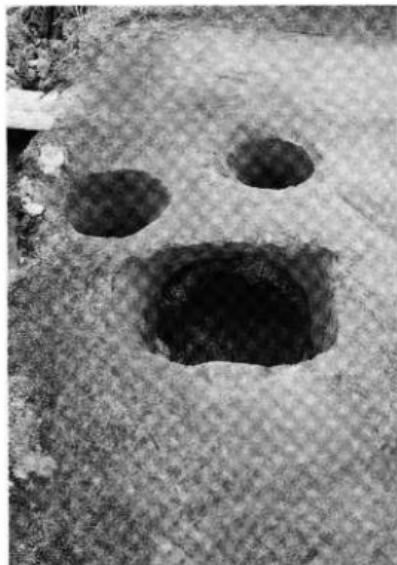
9号住居址出土土器



2101



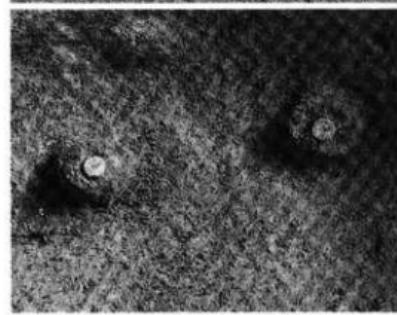
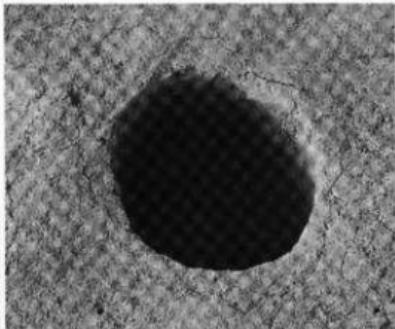
21号住居址(左上:出土土器、右上:カマド、下:全景)



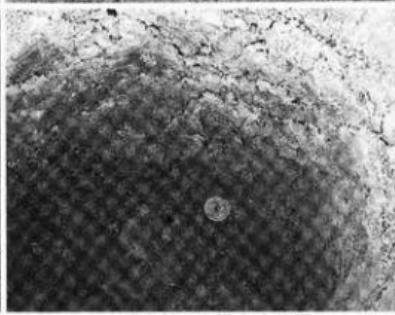
1号地下式坑



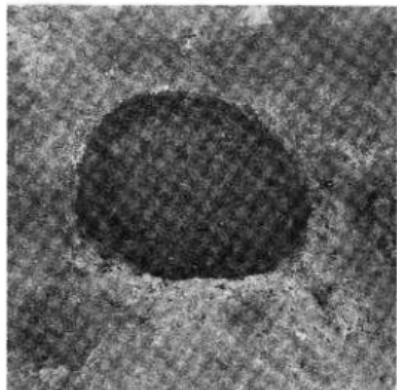
調査風景・出土石臼



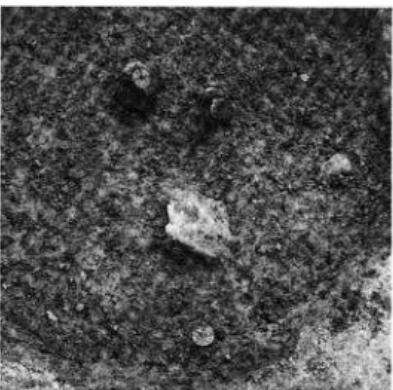
60号土坑・古銭出土状況



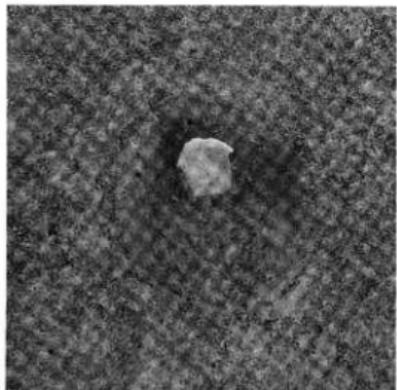
59号土坑・古銭出土状況



28号土坑



28号土坑古錢出土状况



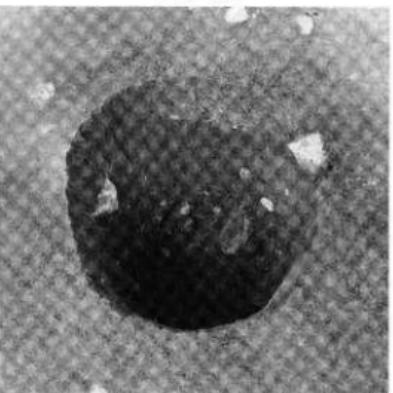
1号土坑



2号土坑



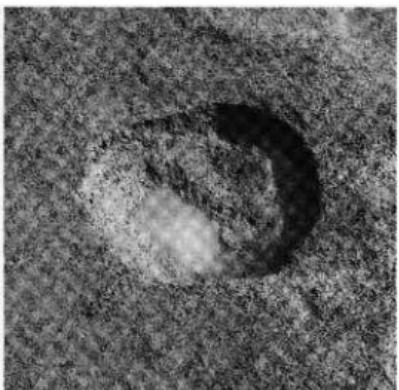
4号土坑



5号土坑



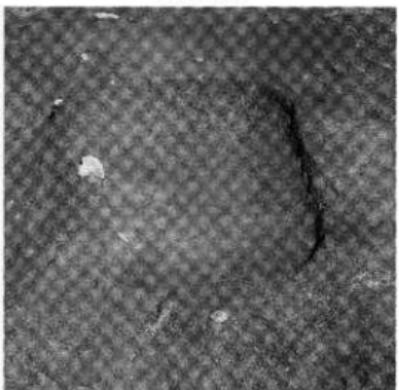
24号土坑



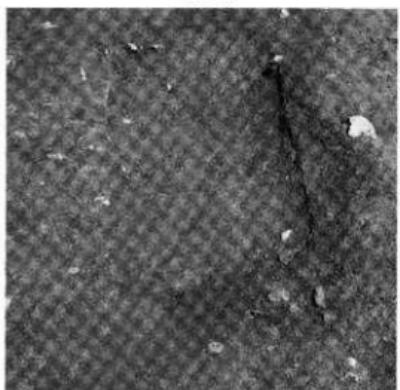
25号土坑



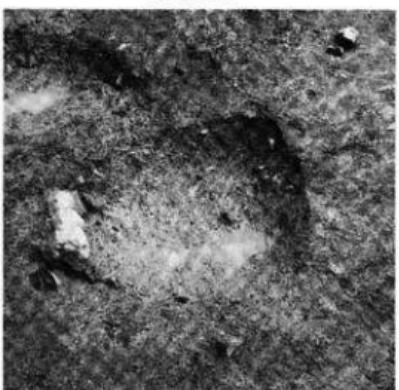
27号土坑



29号土坑



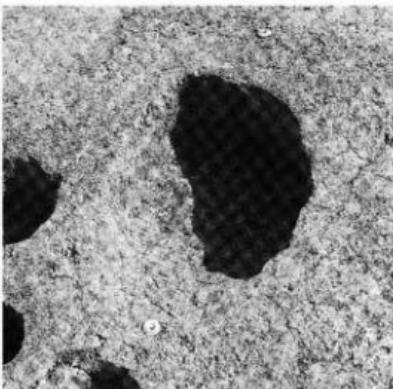
30号土坑



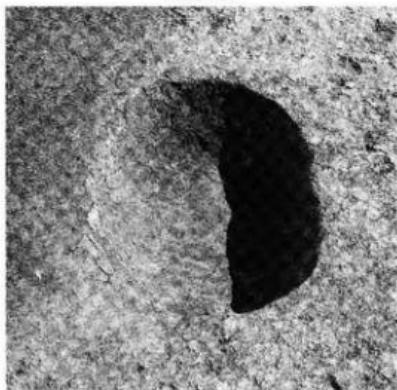
32号土坑



39号土坑



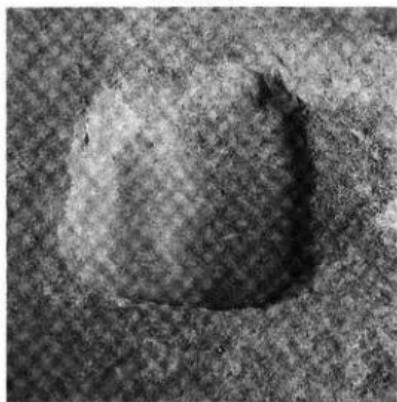
43号土坑



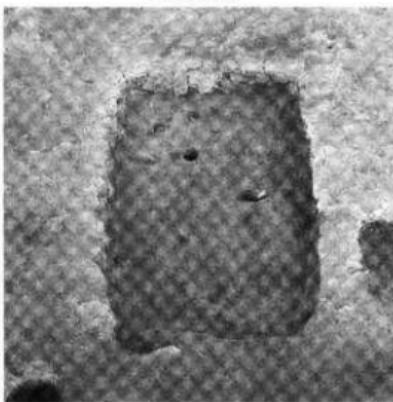
58号土坑



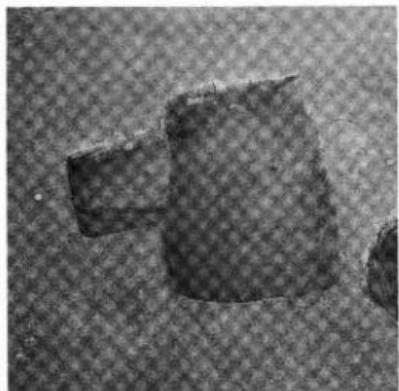
61号土坑



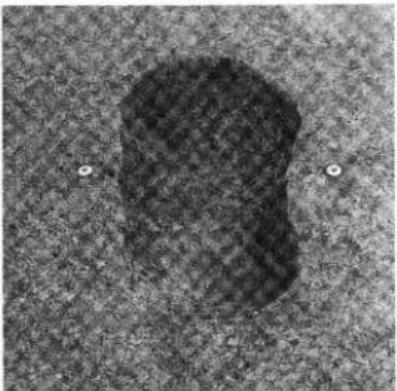
62号土坑



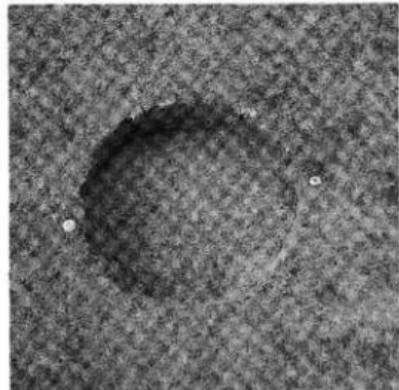
63号土坑



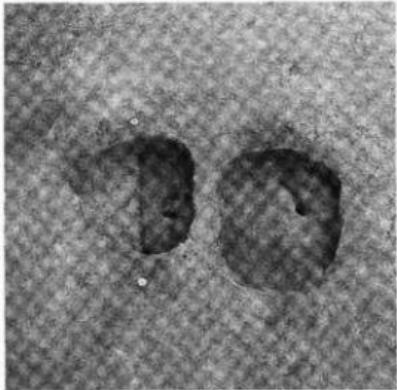
64号土坑



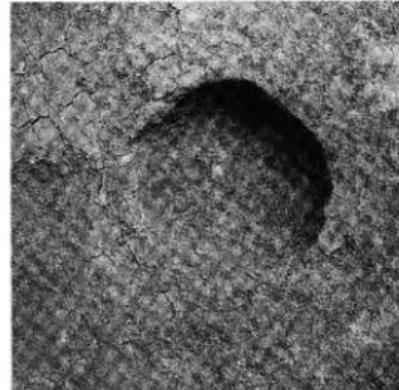
66号土坑



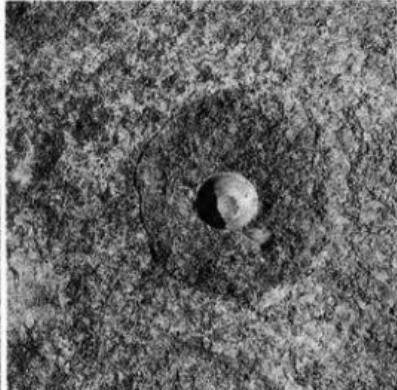
67号土坑



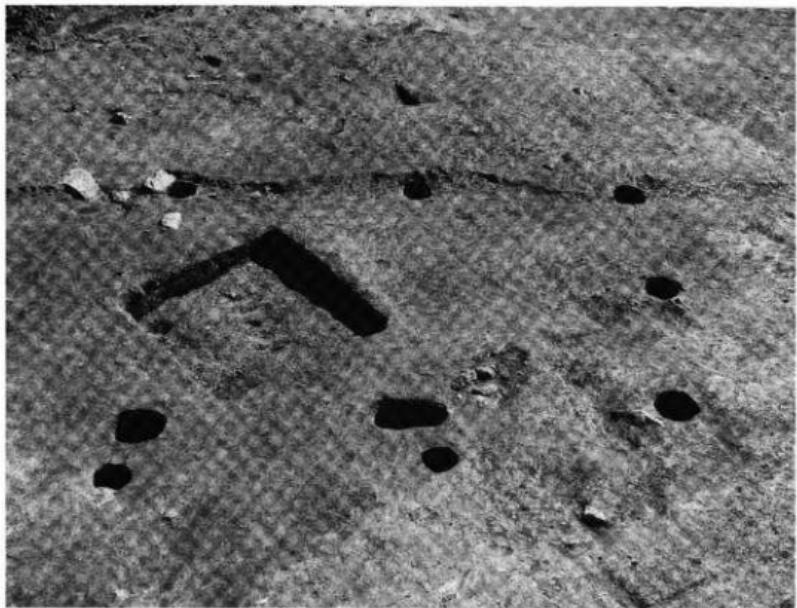
68(左)・69(右) 土坑



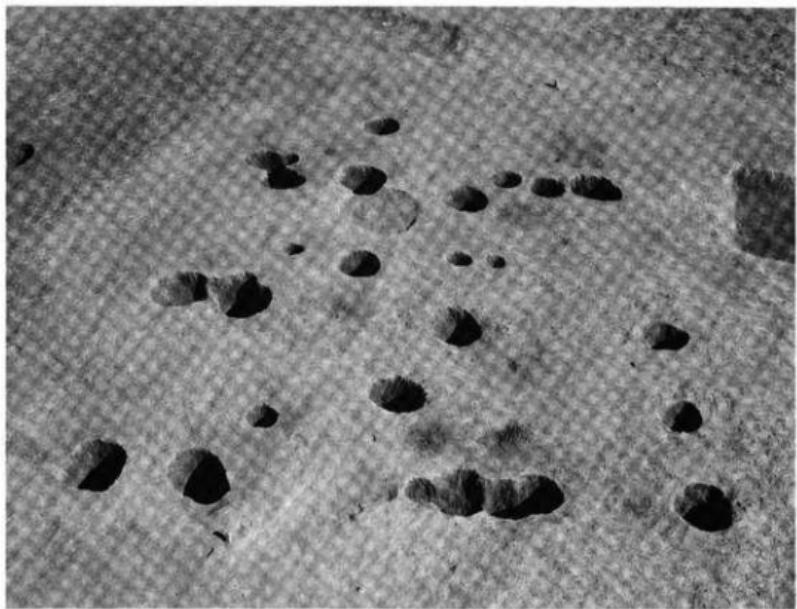
81号土坑



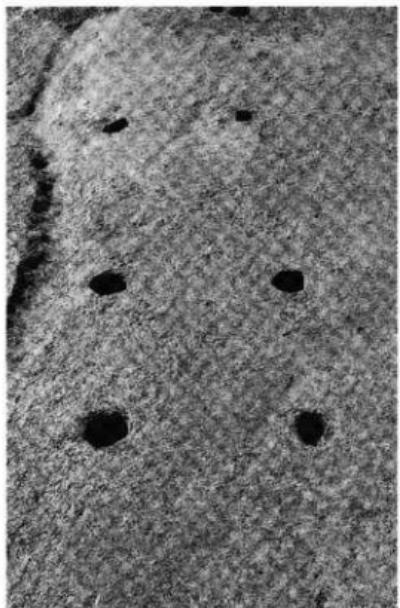
81号土坑土器出土状况



1号掘立柱建物跡



ピット群



2号掘立柱建物跡



1号溝



2号溝



豎穴造構



4・5・6・7号溝



層序



深掘り調査風景



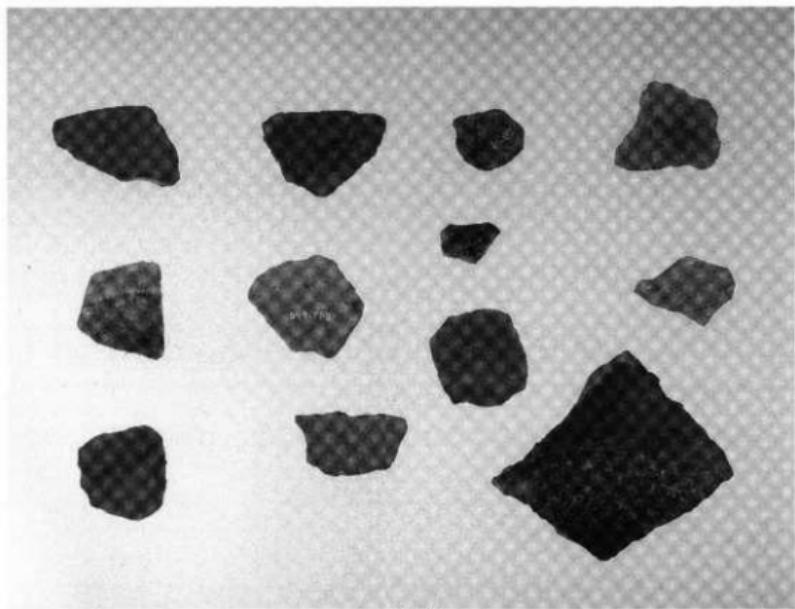
81号土坑出土土器



遺跡の位置



調査風景



出土土器

明野村文化財調査報告 6

宮後遺跡
浦田遺跡

1991.3.30発行

発行 明野村教育委員会
印刷 株式会社サンニチ印刷

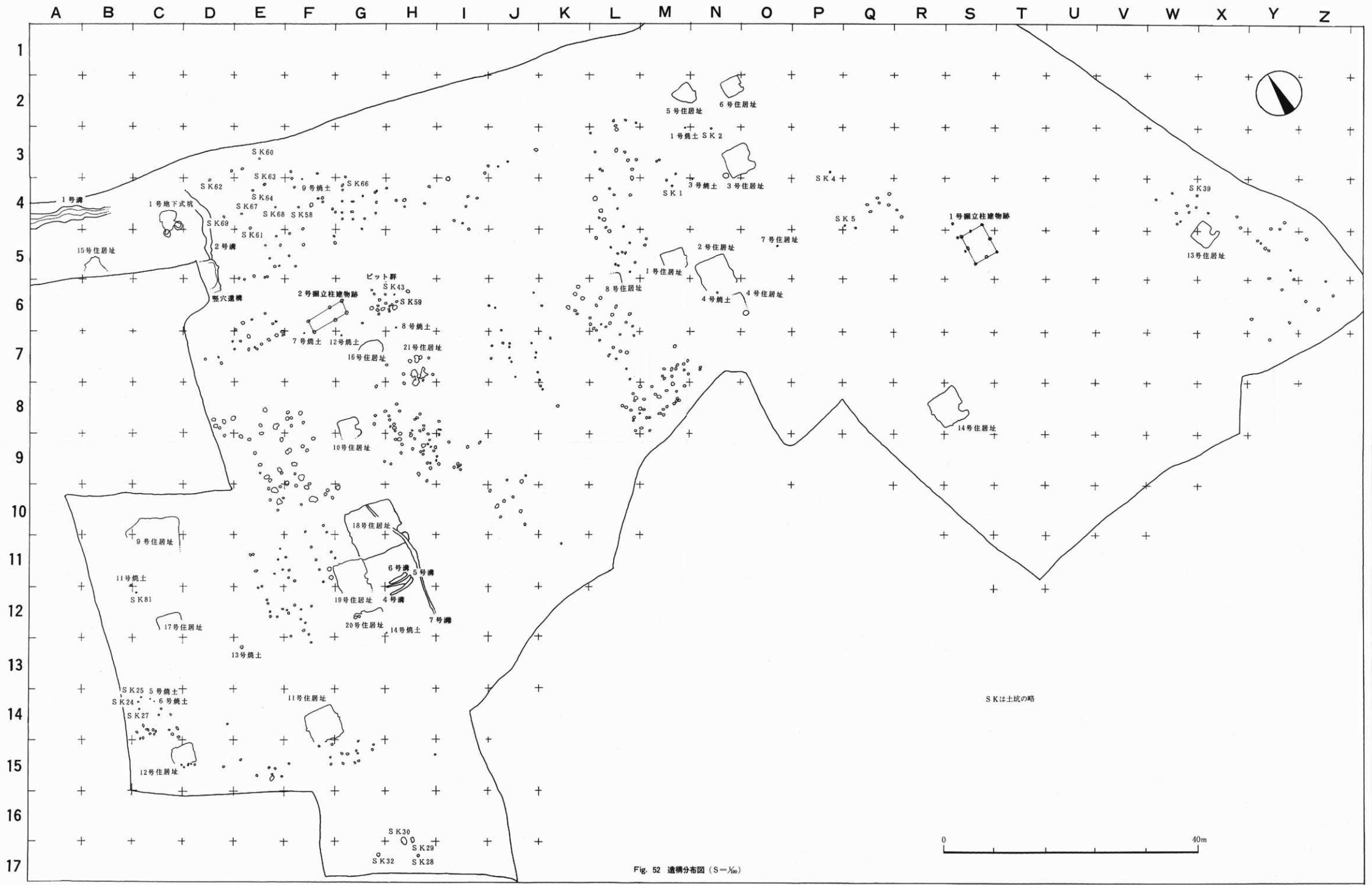


Fig. 52 遺構分布図 (S-Y_{so})

